ツングース諸語における基礎語彙A
(動詞・形容詞編〈承前〉)

東京外国語大学　風間伸次郎

[はじめに]

本稿は風間(1998,「ツングース諸語における基礎語彙A(名詞編)」韓国アルタイ学会編『アルタイ学報』第7号掲載予定)の続編である。本稿の目的等については名詞編に述べたが、ここに簡単に繰り返しておく。ツングース諸語の比較研究に関してはCincius i al.(1975, 1977)という大きな比較辞典(以下ではC.と略す)があるが、これはツングース諸語それぞれにおける同語源の語を、その意味に関わらず同じ項目のもとに整理したものである。しかしこれでは諸語間で同じ意味に対して違う語源からの語がその位置を占めている場合にはその状況がどのようであるのかを把握できない。そこで基礎語彙の項目ごとにツングース諸語の語形を整理することを目指したのがこの論文である。表題における「基礎語彙A」とは『アジア・アフリカ言語調査票　上・下』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1966, 1967)の第1表(A)のことである。本稿では(127)「見る」以下の動詞・形容詞を扱っている。

Ikegami (1974) によれば、ツングース諸語は主に音韻対応に基づいて以下のような四つのグループに分けられる(なお本稿ではそれぞれの言語に以下の( )内のような略号を用いてゆくことにする)。

I群	II群	III群	IV群
エウェン語(Ew)	ウデヘ語(U)	ナーナイ語(Na)	女真語(J)
ソロン語(S)	オロチ語(Oc)	ウルチャ語(Ul)	シベ語(Si)
エウェンキー語(Ek)		ウイルタ語(Ut)	満州語(Ma)
ネギダル語(N)			

中国領内で話されているヘジェン語(Hz)はこれまで(Na)の方言とされてきたが、音韻対応の上からは少なくともIII群の言語の特徴を全く示さず、むしろI II群の言語、特にII群の言語と共通する面を示すことを指摘した(風間 1996a参照)。そこで本稿ではとりあえずII群の(U)及び(Oc)と縦に並べて整理し、それらとの異同に注目することにした。

各言語の語形は、まず(Ew), (S), (Ek1), (Ek2), (U), (Oc), (Na)のそれは筆者自身の調査で採集したものである。なお(Ek1)は中国内蒙古自治区のエウェンキー語ハムニガン方言、(Ek2)は同じく中国内蒙古自治区のエウェンキー語オルグヤ方言である。インフォーマント等の情報については名詞編を参照されたい。

他方(Hz), (Ut), (Si), (Ma), (J)の語形は文献によった。(Hz)は安(1986)の巻末の語彙から、(Ut)は池上(1997)巻末の基礎単語日本語索引によった。(Si)は山本(1969)の日本語索引から調べたが、そこには同源の(Ma)の語形があがっているので(Ma)はこれによった。(J)はKiyose (1977) のp.95以下にある語彙によった。

表記について詳しくは名詞編を参照されたい。(J), (Ma)については津曲(1989)、津曲(1992)、池上(1987)を参考に表記を変えた。

[資料編]

(127)[275]みる（見る）		(Hz)iči-		(J)hača-/turuga-
(Ew)keejət-	(Ek1)icə-	(U)isə-	(Na)iča-	(Si)taa-
(S)iši-	(Ek2)iča-	(Oc)iča-	(Ut)itə-	(Ma)tuwa-

(Ew)keejət-の末尾の-tはアスペクトを示す要素と考えられるが、この語を Novikova (1980)はkeejə-、C.はkejəə-としている。C.によれば(Ew)の諸方言にしかなく、その出自は不明である。

Kiyose (1977) はhača-を「見 to see」、turuga-を「覧 to look」としている。

(Ma)tuwa-についてC.は(J)のčəntəməi tuwanǰula「考選 to examine」のみを同源の語としてあげている。

その他の(S)iši-をはじめとする語形は互いに対応するものと考えられ、C.によればⅣ群を除く全ツングースにある。(Ew)にはič-/it-「見える、気づく、見かける」がある（C.、Novikova 1980）。

(128)[277]きく（聞く）		(Hz)doldi-		(J)dondi-
(Ew)dolči-	(Ek1)dooldi-	(U)duisi-	(Na)dosiǰi-	(Si)dionǰi-
(S)dooldi-	(Ek2)doǰi-	(Oc)dookči-/doogdi-	(Ut)doolǰi-	(Ma)donǰi-

Shnejder (1936) によれば、dogdi-「聞こえる」、dǔisi-「聞く」であり、Onenko (1980) によれば、dooldi-「聞こえる」、dosiǰa-/dosoǰa-「聞く」である。

C.によれば同様の対立が(Ek)（dooldii-「聞こえる」、doolčat-「聞く」）、(Ew)（doldш-「聞こえる」、dolči-「聞く」）、(N)（dooldii-「聞こえる」、dooldiit-「聞く」）、(Ul)（dooldi-「聞こえる」、doosoǰo-/doosoǰi-「聞く」）にある。一方(S)dooldi-, (Oc)doogdii-,(Ut)doolǰi-では対立する語があがっていないが、いずれも「聞こえる（slyshat'）」と訳されており、(Ma)donǰi-は「聞こえる、聞く」となっている。

またC.は(lit.Mo)duγul-「聞こえる、聞く」を参考にあげている。現代モンゴル語ではduul-「聞く、耳に感じる」、duuld-「聞こえる、耳に入る、聞き知る」である（小沢 1983）。

(129)[280]いう（言う）		(Hz)xəzu-		(J)xəndu-
(Ew)geen-	(Ek1)cuugi-	(U)diana-	(Na)un-	(Si)se-
(S)ǰinǰi-	(Ek2)tuurən-	(Oc)digan-/gun-	(Ut)un-	(Ma)sə-

(S)ǰinǰi-はC.にはǰanǰi-であがっており、これと同源の語は(U)ǰaŋgœli-「ふざける、だだをこねる」、(Ul)ǰaŋgira-「不真面目に話す、むだ話をする」、(Na)ǰanaan-「ふざける、冗談を言う」、ǰanǰamori-「不真面目に話す、むだ話をする」、(Ma)ǰaŋgila-「お世辞を言う、言い寄る」である。この分布（アムール下流域型）と、(U)に-ŋg-があることから、(Ma)から広まったものと考えたい。

(Ek1)cuugi-についてC.はcuugii-「騒ぐ、大きい声で話す」とし、モンゴル語（(lit.Mo)šiγugi-「騒ぐ、うるさくする」）から入ったものとしている。(Ma)čurgi-「騒ぐ、大声で話す、叫ぶ」も同じ項目にあげている。

(Ek2)tuurən-と同源の語はC.によればⅠ群の４つの言語に対応する「言う」の意の動詞

があり（ただし(N)では民話中でのみ）、他には(Oc)にのみturpin「（口承文芸としての）話」がある（ただしｒを持っていることから借用されたものである）。(106)「ことば」参照。

(Hz)xəzu-については、アムール下流域に広く分布しているxəsə「ことば」（(106)「ことば」参照）が語源だろうか。(Ma)にはxəsəbu-の語形があるが、(Ma)でxəsəに「天命」の意があるため、「運命が定まる」という意味である。

(U)diana-, (Oc)digan-（Avrorin i Levedeva 1978ではdiggan-）と同源の語についてC.は、(N)dilgan-, (Ul)diljan-/jiljan-, (Ut)jildan-, (Na)jilgan-をあげている（意味はいずれも「声を出す、叫ぶ、言う」などである、(104)「声」も参照）。

上記の(Ew), (Na), (Ut)と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあり、(N), (Ma)を除き、「話す、言う」と訳がついている。(N)は「言う」のみ、(Ma)gūñi-は「思う、熟考する」である。

(Ma)sə-はC.によれば(Ma)にのみ見いだされる。

(J)xəndu-と同源の語はC.によれば(Ut)kən-（池上 1997によればkəən-）「話す」、(Ma)xəndu-「言う、語る、説明する」である。

(130)[283]うたう（歌う）		(Hz)jari-		(J)xudila-
(Ew)ikə-	(Ek1)dablaa-	(U)čaŋala-/jəxə-	(Na)jari-	(Si)učulə-
(S)dooloo-	(Ek2)xəəgəə-	(Oc)iikə-	(Ut)jaaja-	(Ma)učulə-

(Ew)ikə-と同源の語はC.によればⅠⅡⅣ群にあって、Ⅲ群だけにない（(Ek)ikəə-, (Ew)ikəə-, (N)ixəə-/ikə-, (Oc)ikə-, (U)jəxə-, (Ma)jəkə-）、意味は皆「歌う、歌（名詞）」だが、(Ma)のみ「淫らな歌を歌う」で「歌（名詞）」の意がない（羽田 1937）。
(S), (Ek1)の語形はC.によれば(S), (Ek)のみにあって、(lit.Mo)dayla-及び(Mo)duula-よりの借用である。

(Ek2)xəəgəə-と同源の語はC.によれば(Ek)のみにあり、意味は「歌って踊る」で、派生語には「輪舞」の意の語もある。C.は別項目としているが、(Ek)xəəjə-「輪舞を踊る」と同源の語（(Ek), (Ew), (N), (Ut)にある）も、(Ek)内部での方言での分布も相補的なので、同源の語ではないかと思われる。

(Na)jari-と同源の語はC.によれば、(Ek)jara-「歌う、伴唱する」、(Ew)jaramkan-「応える、答える」、(Oc)jarali-「話し出す」、jari-「歌う」、(Ul)jara-「答える、応える」、jaralu-/jarali-「話し出す」、(Na)jarali-「話し出す」、jari-「歌う」、(Ma)jari-「シャーマン神前にあって唱名しつつ祈祷する（この意味は羽田 1937によった）」である。このうち(Oc)にみえる語はｒをもつことからみてⅢ群からの借用である。また普通Ⅲ群では「・・・し始める」の意の動詞の派生接辞は-luであるのに、(Na), (Ul)にはⅠⅡ群で用いられる-liの形が現れている。しかも(Na)ではもとの動詞形がない。したがってⅠ群から入った可能性が考えられる。

(Ut)jaaja-と同源の語はC.によれば(S), (J)を除く全ツングースにあって、(Ul), (Ut)は「歌う」、(Ma)jajada-では「回らぬ舌でしゃべる（意味は羽田 1937によった）」だが、他の言語では皆「シャーマンの歌を歌う、シャーマンする」の意である。(Ul), (Ut)で意味の拡張が起こったものと考えられる。

(U)čaŋala-「（ロシア語の歌を）歌う（Shnejder 1936によれば「楽器を演奏する」の意も）」と同源の語はC.によれば(Ew)čaŋulɯn「金属の音」、(Na)čaaŋgala-「ロシアの歌を歌う」、(Ma)čan「銅鑼によく似た打楽器」、čaŋa「たたきがね」である。

(Ma)uču̇lə-と同源の語はC.によれば(S)uču̇ŋ「歌」があるのみで、これは(Ma)から入ったものだろう。

(J)xudila-と同源の語はC.によれば(Na)xoǰaola-（クル・ウルミ方言）、xoǰila-（ビキン方言）「呼ぶ、招待する」があり、そこでは漢語の「号召hao⁴zhao⁴（呼びかける）」が参考にあがっている。

(131)[285]はなす（話す）	(Hz)xəzu-		(J)---
(Ew)teərə- (Ek1)cuugi-	(U)čulə-	(Na)xisaŋgo-	(Si)gisurə-
(S)ǰinǰildi- (Ek2)tuurən-	(Oc)təəlumuči-	(Ut)kəən-	(Ma)gisurə-

(U)čulə-はC.にもShnejder (1936) にもなく、不明。

(Oc)təəlumuči-と同源の語はC.によれば(Ew)、(N)、(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にあり、(Ew)では「知らせる、伝える、物語る」の意であるが、それ以外は「伝説、実話を語る」の意である。「実話、伝説」はⅠ群ではtəəlɯ/təəluŋ、Ⅱ群ではtəəlugu/təəlumu、Ⅲ群ではtəəluŋgu/təəluguである。

(Na)xisaŋgo-はC.にないが、筆者は以前ナーナイ語の話者（故N. P. Bel'dy氏）より、xisaŋgo-とxəsə(-wə) aŋgo-（文字どおり訳せば「ことばを 作る」）は同じものであると教えていただいたことがある。そうだとすると複合語の形成を好まないツングース諸語において珍しい例ということになる。

(Ma)gisurəについては(106)「ことば」の項参照。それ以外の語については(129)「言う」の項参照。

(132)[291]わらう（笑う）	(Hz)ŋixtənə-		(J)inǰə-
(Ew)iŋ- (Ek1)inəktə-	(U)iŋə-	(Na)inəktə-	(Si)inǰi-/inǰə-
(S)nəttə- (Ek2)iŋə-	(Oc)iŋəktə-	(Ut)inə-	(Ma)inǰə-

上記の諸形は皆お互いに対応するものと考えられる。C.でも全ツングースの語形があがっており、さらに(lit.Mo)inije-「笑う」が参考にあがっている。

(133)[292]なく（泣く）	(Hz)soŋo-		(J)songo-
(Ew)xoŋ- (Ek1)soŋo-	(U)soŋo-	(Na)soŋgo-	(Si)soŋo-
(S)soŋo- (Ek2)soŋo-	(Oc)soŋo-	(Ut)soŋo-	(Ma)soŋə-

C.にも全ツングースの語形があがっている。

(134)[296]おこる（怒る）	(Hz)xaŋko-		(J)fəši-
(Ew)xiir- (Ek1)tikuuli-	(U)tagda-	(Na)ajaktala-	(Si)fanča-
(S)alii- (Ek2)tikuul-	(Oc)ajaktala-/tagda-	(Ut)tagda-	(Ma)fanča-

C.によれば(Ew)xiir-と同源の語は他の言語になく、(Ew)のこの語形のみである。

C.によれば(S)alii-と同源の語はⅠ群の４つの言語にしかなく、(Ek)、(N)はali-「怒る」、

(Ew)alit-は「憎む、嫌う」である。

C.によれば上記の(Ek1)，(Ek2)にみられる語形と同源の語はⅠ群のうちの(Ek)，(S)，(Ew)にしかなく、(S)tegul-，(Ew)tikul-（意味は共に「怒る」）である。

(Hz)xaŋko-と同源の語はC.によれば(Ek)xanuu-「息苦しくなる」、(Ew)xanun-「息苦しくなる、むせる、溺れる」、(N)xan-「息苦しくなる」、(Oc)xaŋkapsi「暑苦しい」、(U)xaŋka-「暑さで息苦しい」、(Ut)paŋa-「息苦しくなる」、(Na)paiŋka-、及びxaŋka-（クル・ウルミ方言）「息苦しくなる、腹をたてる、激怒する」、(Ma)faŋša-「いぶす」である。

(U)tagda-と同源の語はC.によれば(N)，(Oc)，(U)，(Ul)，(Ut)，(Na)にあり、これはアムール下流域型分布であるが、(Ma)にない。語形も皆tagda-で、意味も皆tagda-である。(Na)から広まったものだろうか。Ⅰ群では(N)にしかないことから、少なくとも(N)にはおそらく他の言語から入ったものと考えられる。

(Na)ajaktala-と同源の語はC.によれば(Ek)，(N)，(Oc)，(Ul)，(Na)にあるが、(Ek)を除いて「怒る」の意であり、同時にajakta「意地悪い、怒りっぽい」があがっている。(Ek)のみはajakta「勇敢な」である。

(Ma)fanča-と同源の語はC.によれば(S)paňči-，(N)pači-，(Oc)paan-，(Ul)pačursu-，(Na)pakpari-/pakčiači-，(Ma)fanča-であり、(S)，(Na)は「怒る」だが、(N)，(Ul)は「すねる、気まぐれをおこす」、(Oc)は「悲しむ、がっかりする」である。ⅠⅡ群の(S)，(N)，(Oc)に p で始まる語があるのはおかしいし、アムール下流域型の分布をしているので、満州語より広まったものと考えたい。ちなみにCincius (1982) によれば(N)で p に始まる語は89語あるが、うち擬声語が15語あり、(Ul)からの借用と明記しているものが6語ある。ただし(Ul)から借用した語は実際にはもっとずっと多いにちがいない。(Oc)ではAvrorin i Levedevaによれば p で始まる語は150語ある。

C.によれば(J)fəši-と同源の語は(Ek)xəkərgə-「腹をたてる」，(Ew)xəkuruŋči-心配する」，(Ul)pəkən-「腹をたてる」，(Ma)foxodo-「いまいましく思う、くやしがる、怒る」，fəxərə-「けわしい表情になる」である。

(135)[297]おどろく（驚く）	(Hz)---	(J)---
(Ew)miaŋči- (Ek1)gajka-	(U)xuənə-/xalaŋgi-(Na)xajam	(Si)gelə-
(S)nəələ-/olo- (Ek2)olo-	(Oc)pəksə- (Ut)olo-	(Ma)gələ-

(Ew)miaŋči-と同源の語はC.によれば(Ek)məəmbə-「心配する」，(Ew)mɛɛn-「驚く、興味を持つ」、(Ul)meen-「踌躇する、途方にくれる」、(Na)mian-「踌躇する、驚く、ぞっとする」である。

(S)nəələ-、(Si)gelə-、(Ma)gələ-と同源の語はC.によれば全ツングースにあり、他の言語ではŋəələ-/ŋələ-の語形で主に「恐れる」の意だが、ほとんどの言語に「驚く（pugat'sja）」の意もあがっている。

(S)，(Ek2)のolo-と同源の語は、C.によれば(U)，(J)を除く全ツングースにあり、(Ma)以外は「驚く（ispugat'sja）、（急な物音などに）びくっとする」の意である。 (Ma)olixada-は「おびえる、恐れる」の意であるという。

(Ek1)gajka-と同源の語はC.によれば(Ek)gajka-，(S)gaixa-（共に「驚く（udivljat'

sja)」)、(U)gaiti, (Na)gajtaj, (Ma)gajtaj(意味は皆「急に、すぐに、速く」)、(Ma)gajka-「言い触らす」であり、(lit.Mo)ɣaixa-「驚く」を参考にあげている。I II III各群の一部にだけ分布しているので、(Ek), (S), (Ma)にはモンゴル語から、(U), (Na)には(Ma)から入ったものではないだろうか。

(U)xuənə-と同源の語はC.によれば(Ek)xənuu-, (Ew)xəənu-, (N)xənu-, (Ut)xənun-(意味は皆、主に「気づく」)、(U)xono-/xuənə-「驚く」、(Ul)punu-「疑い始める、うすうす感づく」である。(Ut)は(Ul)の語形が p で始まっていることからみて(Ek)からの借用であろう。なお(U)xalaŋgi-は(U)にもなく、不明。

(Oc)pəksə-と同源の語はC.によれば(N)pəskə-, (Oc)pəksi-/pəksə-, (Ul)pəksi-/pəskə-/pəski-, (Ut)pəskə-, (Na)pəksə-で、意味は皆「驚く」である。池上(1989)によれば、普通祖語の*-ks-は(N)-ks-/-s-‖(Oc)-ks-‖(Ul)-ks-‖(Ut)-ks-/-sk-‖(Na)-ks-と対応するはずなので、(N), (Ul)の語形が奇妙である。

(Na)xajamは擬態語で、副詞的に使われる。Onenko(1980)によれば、「呆然自失となって、途方にくれて」の意である。Onenko(1986)によれば「驚く(ispugat'sja)」には(Na)gəələ-, olo-が、「驚く(udivljat'sja)」にはərdəŋgəsi-があがっている。

(136)[298]うつ(打つ)

(Ew)kusi- (Ek1)sukə- (Hz)tanta- (Na)duktə-/paačila- (J)dugu-
(S)mundaa- (Ek2)duktə- (U)waa-/koŋgo- /siantola- (Si)tandə-
(Oc)paati- (Ut)duxin-/mində- (Ma)tanta-
/paačila-/paači-
/panada-/tukpən-

インフォーマントによれば、(Na)の諸形の意味について、duktə-は「叩く(bit')」、paačila-は「叩く(udarjat')」、siantola-は「(げんこつで)殴る」であるという。

(Ut)の諸形の意味について、池上(1997)によれば、duxin-「たたく、うつ」、mində-「棒でうつ」、paačila-「たたく、うつ(一回)」、paači-「たたく、うつ」、panada-「平手でうつ」、tukpən-「打ち込む(くぎをつちで)、くぎをうつ」であるという。

(Ew)kusi-と同源の語はC.によれば全ツングースにあるが、I群では(S)を除き(Ek)kusii-などの形で「喧嘩する、殴り合う」の意の動詞が主にあがっているのに対し、II III IV群では(Na)kusun「力」をはじめ名詞が主であがっている。なお Novikova (1980) でも (Ew) kusi-は「喧嘩する、殴り合う」となっている。

(S)mundaa-はC.によれば(S)にしかない。

(Ek1)sukə-はC.によれば(Ek)sukə-「斧で薪を割る」、sukə「斧」としてあがっており、同源の語は(S), (N), (Oc), (U), (Na), (Ma)にあり、(lit.Mo)süke「斧」から入ったものとみている。つまり(Ew), (Ul), (Ut)の三言語にはこの借用の波が及ばなかったと考えられる。ちなみに「斧」は(Ew)では、Cincius i Rishes (1952) によればtobar(ロシア語toporより)、ňaan(不明、C.によれば(Ew)のみ)、(Ul)でsakpin(不明、C.によれば(Ul)のみ)、(Ut)では池上(1997)によればmasaari(日本語から)、toporo(ロシア語から)である。

(Ek2), (Na)にみられるduktə-はC.によればdu-/duu-/dug-もしくはduktə-の語形で、「打つ、叩く」の意で全ツングースにあがっている。上記の(Ut)duxin-も C.では(Ut)

duuxin-の形でここにあがっている。ただし(Ma)は「棒で叩く」の意となっている。ここで-ktəは多回を示すアスペクトの要素と考えられる。

(U)waa-は(149)「殺す」の項参照。(U)koŋgo-はC.及びShnejder (1936) ではkoŋko-「硬いもので叩く」、となっており、これと同源の語はC.によれば(S), (J)を除く全ツングースにあって、(Ek), (Ul), (Na)では「空の物を叩く」の意となっている。

(Oc)paati-などと同源の語は、C.によれば(Ew)patul-「打つ」、(N)paati「皮なめしの槌」、(Oc)papati「皮なめしの槌」、paati-「打つ」、(U)paktan-「打つ」、そしてⅢ群の(Ul)paatila-「打つ」、paati「槌」、(Ut)patčilla-「打つ」、(Na)paačila-「打つ」、pači「槌」である。語頭に p-があるので、(N), (Oc)の語はⅢ群からの借用ではないか。しかし(Ew), (U)にも p-ではじまる語があるのは不可解である。擬音的な語であるためだろうか。日本語でも擬音語には語頭の p-が残ったという説がある。

(Na)siantola-はsianto「げんこつ」に動詞形成接辞の-laがついてできたものだが、これと同源の語はC.によればⅡ群とⅢ群にしかなく、それぞれ同様の形で名詞「げんこつ」と「げんこつで殴る」を持っている。漢語では「げんこつ、こぶし」は「拳頭quan²tou」であるから、これは漢語から入ったものだろう。

(Ut)mində-と同源の語はC.によれば、(N)mina-, (Oc)mində-, (Ut)minda-で、(N), (Ut)は「タイコを叩く」、(Oc)は「棒で打つ」となっている。

(Ut)panada-は(Ut)pana「手のひら、足のうら」からの派生語で、C.によればこの名詞と同源の語は(S), (J)を除く全ツングースにあり、(Ma)faifan「手拍子」以外は「手のひら」の意である。また朝克 (1995, 1997) には(S)aŋga「手のひら」があがっているので(S)にもある。

(Ut)tukpən-と同源の語はC.によれば「釘」の意の名詞、もしくは「(釘などを)打ち込む」の意で(Ma), (J)を除く全ツングースにあがっている ((Ek)tipkən, (Oc)tippəなど)。

上記の(Hz), (Si), (Ma)にみられる諸形と同源の語はC.によれば (Ew) アルマン方言tantok「キツツキ」、(Ut)tatutči-「タイコを叩く」、(Na)クル・ウルミ方言tanta-「叩く」と(Ma)tanta-である。

(137)[308]おす (押す)		(Hz)ana-		(J)---
(Ew)tiŋi-	(Ek1)ana-	(U)ana-/anauli-	(Na)ǰigda-/ana-	(Si)anə-/šixə-
(S)ana-	(Ek2)ana-	(Oc)ana-	(Ut)ana-	(Ma)ana-

(Ew)tiŋi-と同源の語はC.によれば(Ek)tiin-「押さえつける」、(Ew)tiŋi-「押さえつける」、(U)tuun-「氷が堆積を作る」、(Na)クル・ウルミ方言tiŋku「ネズミ捕り」である。

(Na)ǰigda-「押さえつける」はC.によれば(Na)のみにしかない。

(Ek1)ana-をはじめとする諸形と同源の語はC.によれば全ツングースにあるが、C.には(S)ana-「押す」があがっていない。またC.は(J)ala-「はめ込む」としているが、Kiyose (1977) は「負ける」としている。

(138)[310]もつ (持つ)		(Hz)ǰafa-		(J)ǰafa-
(Ew)ǰawat-	(Ek1)zabuuča-	(U)ǰawasi-	(Na)ǰapači-	(Si)ǰafə-
(S)ga-	(Ek2)ŋaalixin-	(Oc)ǰawača-	(Ut)daputa-	(Ma)ǰafa-

(Ek2)ŋaalixin-はC.によれば(Ek)ŋaalə「手」からの派生語で、他にも(Ew)、(N)にこのような動詞がみられるが、II III群にはない。(Ma)にはgalada-「手をつける」がある。

(Ew)ǰawat-をはじめとする諸形と同源の語はC.によれば主に「つかむ」の意で全ツングースにある。

(S)ga-と同源の語はC.によれば「取る、買う」などの意で全ツングースにある。

(139)[316]あるく（歩く）		(Hz)fuli-		(J)fuli-
(Ew)girka-	(Ek1)uli-	(U)xuli-/giana-(Na)pulsi-		(Si)aləqə-/javə-/suǰi-
(S)uli-	(Ek2)xuru-	(Oc)ŋənə-/xuliktə-(Ut)gitu-/pulisi-		(Ma)jabu-/suǰu-

(Ew)girka-、(U)giana-、(Ut)gitu-と同源の語はC.によれば(Ek)giran-「歩く（shagat'）、跨ぐ」をはじめとする形で(S)、(Ma)、(J)を除く全ツングースにあがっている。 朝克(1997)によれば(S)にもgira-「跨ぐ」がある。

(Ek2)xuru-はC.によれば(Ek)suru-「去る」、(Ew)xər-「去る」がよく使われるようであるが、それ以外には(N)sojiwuk（<*soruwuk）「贈り物（古語）」があるだけである。

(S)、(Ek1)、(Hz)、(U)、(Oc)、(Na)、(Ut)、(J)にみられる諸形と同源の語はC.によれば全ツングースにあるが、(Ek)ではあまり使われていないようだ。

(Si)aləqə-は(lit.Mo)alqu-「行進する、歩く」（小沢 1983）から、(Si)javə-、(Ma)jabu-も(lit.Mo)jabu-「行く」から入ったものである。

(Si)suǰi-は山本（1969）によれば「足早に歩く」の意であり、(Ma)suǰu-は羽田（1937）によれば「駆ける、走る」である。これらと同源の語はC.によれば(Ek)sučа-、(U)susa-、(Na)čučа-などで、主に「逃げる」の意である。C.では(Ul)、(Ut)、(J)以外の全ツングースにあがっている。実は(Ul)、(Ut)にも(Ul)tučа-、(Ut)tuta-（共に「逃げる」）があって対応するのだが、C.はこれらを(Na)tutu-「走る」と同源のものと考えたためであろう、ここにあげていない。

(140)[319]はしる（走る）		(Hz)bugdanə-		(J)---
(Ew)tiba-	(Ek1)tuksa-	(U)tukia-	(Na)tutu-	(Si)fəksi-
(S)uttəlii-	(Ek2)tuuxa-	(Oc)tutu-	(Ut)tuksa-	(Ma)fekəši-

(Ew)tiba-と同源の語はC.によれば(U)tif「（擬態語）途物からすばやく出ていくさま」があるだけだが、はたしてこれも対応する語か疑わしい。

(S)uttəlii-及び(Si)fəksi-、(Ma)fekəši-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあり（(Ek)xukti-、(Na)pukči-など）、(Ew)は「（動物を）引きずって持っていく」の意、(S)、(Ma)は「（馬が）走る」の意だが、他の言語は皆「（動物がギャロップなどで）走る」の意である。

(Ek1)tuksa-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあるが、III群の(Ul)と(Na)ではもっぱら「ウサギ」の意のみで、「走る」などの意の動詞がない。「ウサギ」の意は(Ew)、(Ma)、(J)を除く全ツングースにあり、I II群ではこの群に共通してみられる動物を示す接尾辞-kiを持つ（(33)「犬」の項参照）。(Ma)toksakaでは「私生児」の意であ

るが、(Na)toksaが「ウサギ、私生児」であることから考えて、かつては「ウサギ」の意味を持っていたのだが、悪い意味で使われるためにこれを別の語ととりかえたのではないだろうか。ちなみにウサギは山本（1969）、Kiyose（1977）によれば(Ma)gūləmaxūn, (Si) Guləmahun, (J)gulmaxaiで、C.によれば(Ma), (J)と(Na)にある。(Na)には(Ma)から入ったものだろう。山本（1969）によれば(Si)Guləmahunもやはり悪口に使われる。

(Hz)bugdanə-と同源の語はC.によれば(S)buugun-「保存する」、(Ew)bugun-「隠れる」、(Ut)bui-/buj-「貯蔵する、保存する」、(Na)bugda-「隠れる、走る」、(Ma)buksi-「隠れる、待ち伏せる」である。

(Oc)(Na)tutu-と同源の語はC.によれば(S), (Ew), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na)にあるが、このうち(Ut)のものは(Na)čočа-「逃げる」などと同源と考えられることは先に述べた。

(141)[321]たつ（立つ）		(Hz)ili-		(J)ili-
(Ew)ilшt-	(Ek1)ilii-	(U)ili-	(Na)ilisi-	(Si)ii-/ila-
(S)ili-	(Ek2)ilgiima-	(Oc)ilisi-	(Ut)ili-	(Ma)ili-

(142)[322]すわる（座る）		(Hz)tə-		(J)tə-
(Ew)təgət-	(Ek1)təgə-	(U)təə-	(Na)təə-/təəsi-	(Si)te-/teča-
(S)təgə-	(Ek2)təgə-	(Oc)təəsi-	(Ut)təə-	(Ma)tə-/təča-

(143)[324]ねる（寝る）		(Hz)---		(J)---
(Ew)xuklə-	(Ek1)ukələə-	(U)kəptə-	(Na)akpaŋgo-	(Si)dudu-
(S)xuləə-	(Ek2)xukləə-	(Oc)čoroči-	(Ut)akpan-	(Ma)dədu-

(Ew), (S), (Ek1 2)にみられる諸形と同源の語はC.によればI群の四つの言語と(Na)クル・ウルミ方言だけにある。したがってI群に特徴的な語と考えることができる。

(U)kəptə-と同源の語はC.によれば(N)にkəptu kəptu/kəptə kəptə「眠そうに、ウトウト（擬態語）」があるだけである。

(Oc)čoroči-と同源の語はC.によれば(Ek)čərərgə-「平らに横たわる」、(N)čorojkin-「仰向けに倒れる」、(Oc)čoroči-「仰向けに寝る」、(Ul)čoroči-, (Ut)toroči-, (Na)čoroačі-（以上III群の三つの言語では意味は「仰向けに寝る」）である。rがあることから、(N)と(Oc)の語形はIII群からもたらされた可能性がある。(Ek)がなければ、アムール下流域型分布といえるのだが。

(Na)akpaŋgo-, (Ut)akpan-についてC.は次の(144)「眠る」に見られる(Ek)aasin-などと比較している。

(Si)dudu-, (Ma)dədu-と同源の語についてC.は次の(144)「寝る」の(J)tədu-、及び(Oc)dəə「寝床」のみを比較している。

(144)[325]ねむる（眠る）		(Hz)afinə-		(J)tədu-
(Ew)---	(Ek1)aasin-	(U)ŋua-	(Na)ao-	(Si)aməxə-
(S)aašin-	(Ek2)aaxin-	(Oc)aapin-/aa-	(Ut)au-	(Ma)amga-/amxa-

(U)ŋua-と同源の語はC.によれば(Oc)ŋua-があるだけだが、Avrorin i Levedeva (1978)

にそのような語はなく、筆者の調査でもそのような語は現れなかった。C.の(Oc)gua-の出典はSchmidt (1927) であり、それが間違っていることが考えられる。するとこの語は(U)だけにみられるということになる。(J)tədu-については先に(143)「寝る」の項で述べた。

他の言語の諸形は対応するものと考えられるが、その対応は複雑である。ここにはないが、(Na)にapsin-「横になる」があり、(Hz)、(Oc)の語形はこれと対応するものと考えられる。ⅠⅢ群にはこのような-pi-/-fi-をもつ語形がないから、これも(Hz)が系統的にⅡ群にもっとも近いことを主張する根拠の一つとなろう。

(145)[328]たべる（食べる）		(Hz)ǰəfu-		(J)ǰəfu
(Ew)ǰəp-	(Ek1)zəp-	(U)digə-/ǰəptə-	(Na)sia-	(Si)ǰe-/ǰetə-
(S)ǰit-	(Ek2)siluu-	(Oc)ǰəp-	(Ut)dəptə-	(Ma)ǰə-

(Ek2)siluu-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースに(Ek)siləをはじめとする「スープ」があり、(S)を除くⅠ群の三言語には「スープを飲む」の意の動詞がある。C.はさらに(lit.Mo)のšilün「スープ」と比較している。

(U)digə-と同源の語はC.によれば(Ek)dirga「食道」、(U)diga-「食べる、常食とする」、(Ul)dirgan「食べ物が豊富にある」、dirga-「何不自由なく暮らす」、(Na)ǰirgan「食べ物が豊富にある」、ǰirga-「何不自由なく暮らす」である。

(Na)sia-と同源の語はC.によれば「咬む、噛む」の意で(S)と(J)を除く全ツングースにあがっているし、(Na)でもアムールのより下流ではǰəp-を用いるので、(Na)の一部の方言において意味の拡大が起こったものと考えられる。

(146)[329]のむ（飲む）		(Hz)omi-		(J)omi-
(Ew)kool-	(Ek1)imi-	(U)umi-	(Na)omi-	(Si)iomi-
(S)imi-	(Ek2)umu-	(Oc)imi-/umi-	(Ut)umi-	(Ma)omi-

(Ew)と同源の語はC.によれば(Ek)kool-, (Ew)kool-, (N)koli-（以上は皆「飲む」）、(N)kolimusi-, (Ul)kooǰomsi-, (Ut)kodomo-/kodomu-（以上は皆「喉が渇く」）である。

(147)[337]とぶ（飛ぶ）		(Hz)dəgdə-		(J)---
(Ew)dəg-	(Ek1)dəgili-	(U)diəli-	(Na)dəgdə-	(Si)dəjə-
(S)dəgili-	(Ek2)dəgi-	(Oc)dəili-	(Ut)səgdə-	(Ma)dəi-/dii-

ⅠⅡ群にみえる-liの要素は開始のアスペクトを示す接辞由来するものだろう。他方Ⅲ群にみえる-dəの要素はツングースの諸言語に共通してみられる不規則動詞bur-「死ぬ」、ga-「取る」などの現在形に現れる要素ではないだろうか。Novikova (1968) はこれを「ある状態から別の状態への変化を示す動詞に現れるもの」とみているが「飛び立つ」動作はこれにあてはまると考える。

(148)[345]やく（焼く）		(Hz)ǰigdə-		(J)---
(Ew)čaarit-	(Ek1)kapsa-	(U)daga-/kaksi-	(Na)ǰəgǰi-	(Si)šolo-
(S)šila-	(Ek2)xigə-	(Oc)kaamuči-/ǰali-	(Ut)dalda-	(Ma)šolə-/šolu-

(Ew)čaarit-はロシア語より。

(S)šila-, (Si)šolo-, (Ma)šolə-/šolu-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあり、「焼き串」、「焼き串に刺す」、「焼き串で焼く」の意である。C.はさらに(lit. Mo)sira-「焼く」と比較している。

(Ek1)kapsa-は不明。(Ek2)xigə-と同源の語はC.によれば(S), (Oc), (J)を除く全ツングースにあり、「暖を取る、暖める、火にかける、焼いて調理する」などの意である。ただし(U)pikilə-は p ではじまっているので、(Na)から入ったものではないか。

(Hz), (Na)にみられる語形と同源の語は(S)を除きⅠⅡⅢ群の全言語で ǰəgdə- ((Ut)は dəgdə-) 「燃える」であり、Ⅳ群の(Ma), (J)では「燃やす」である。

(U)daga-と同源の語はC.によれば(Ek)dalga-「(焼き串、フライパンで) 焼く」など、(Oc), (Ma), (J)を除く全ツングースにある。

(U)kaksi-と同源の語はC.によれば(N), (U), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)にあり、(U) kakčisi-は「表面を焼く、あぶる」、(Ut)kakči-は「赤熱する」、(Na)kaktariは「焦げてむせっぽい」、他の言語には共通して「(表面がところどころ) 焼ける、焦げ臭くなる」の意の動詞があがっている。

(Oc)のkaamuči-及びǰali-は不明、Avrorin i Levedeva (1978) にも見いだせなかった。

(Ut)dalda-もC.に記載がない。池上 (1994) では「焼く」について二人のインフォーマントからdəgǰi-を採っている。池上 (1997) ではdəgǰi-「燃やす」となっている。

(149)[349]ころす (殺す)		(Hz)wa-		(J)wadu-
(Ew)maa-	(Ek1)waa-	(U)waa-	(Na)waa-	(Si)vaa-
(S)waa-	(Ek2)waa-	(Oc)waa-	(Ut)waa-	(Ma)wa-

(150)[356]きる (着る)		(Hz)titi-		(J)ətu-
(Ew)tət-	(Ek1)titə-	(U)tətigi-	(Na)tətuələ-	(Si)utu-
(S)titə-	(Ek2)təti-	(Oc)təti-	(Ut)tətu-	(Ma)ətu-

(28)「着物」の項参照。

(151)[359]よむ (読む)		(Hz)xola-		(J)taun-/finija-
(Ew)taŋ-	(Ek1)taŋi-	(U)taŋi-	(Na)---	(Si)taa-/xula-
(S)iši-/əəri-	(Ek2)taŋa-	(Oc)taŋi-	(Ut)taun-	(Ma)tuwa-/hūla-

C.では上記の(Ew), (Ek1), (Ek2), (U), (Oc)にみられる語形と(Ut)にみられる語形を同源のものとして一つの項目のもとにあげている。C.のその項目によれば、(S)を除くⅠⅡ群の全言語でtaŋ-/taaŋ/taŋi-「読む、数える」であり、Ⅲ群では(Ul)taun-「読む」、(Ut) taun-「読む、数える」、(Na)taon-「数える」である。(Ma)には対応する動詞はあがっていない。しかし(127)「見る」の項でみたように、(Ma)tuwa-はC.では(J)以外に対応する語を持たないと考えている。この(Ma)tuwa-も対応すると考えてよいのではないだろうか。なおC.はさらに(lit. Mo)toγa-n「数、数量」を比較している。なお山本 (1969) はtaa-を「黙読する」、hula-を「音読する」としている。

(S)iši-は「音読する」の意で、(127)「見る」の項を参照されたい。(S)əəri-と同源の語はC.によればⅡ群と(Ma)を除く全ツングースにあがっていて、「叫ぶ、呼ぶ」の意であ

る（(Ek)əərii-, (Na)xəərsi-など、ただし(J)では「話」）。

(Na)ではこの調査では得られなかったが、上記の(Hz), (Si), (Ma)にもみられる (Na) xola-「読む」が普通に使われる。C.によればこれと同源の語はやはり(Na), (Ma), (J)にしかなく、さらにC.は漢語の「呼 hu^1」を比較している。

(152)[361]きる（切る）		(Hz)xoji-/xaǰila-		(J)
(Ew)miinə-	(Ek1)mii-	(U)kusigusi-/ǰi-/xuai-	(Na)caaso-	(Si)fiatə-/saǩə-
(S)ǰigə-	(Ek2)ǰigə-	(Oc)miinə-/kuǩəli-	(Ut)ǩigasu-	/furu-/miti-
			/ǩigali-	/dajəvə-
			/ǩiŋguli-	(Ma)faita-
			/miinə-/mii-	/saǩi-/furu-
			/xoo-	/məitə-

(Ut)の諸形の意味について池上（1997）には、ǩigasu-「切る、折る（何回も）」、ǩigali-「切る、折る（一回）」、ǩiŋguli-「（斧や鋸で）切る、（手で）折る」、miinə-「繰り返し切っている、細かく切る」、mii-「切る、少し切る」、xoo-「斧で打って切る」とある。

(Si)の諸形の意味について山本（1969）には、fiatə-「切り取る」、saǩə-「切りつける、斬る」、furu-「上から下へ切る、両断する」、miti-「切断する、断ち切る」、dajəvə-「切り傷をつける」とある。

(Ew), (Ek1), (Oc), (Ut), (Si), (Ma)にみられるmii-/miinə-/miti-/məitə-と同源の語はC.によれば(S)を除く全ツングースにある。C.によればⅢ群では (Ul)ŋui-, (Ut)mii-/miinə-, (Na)mui-/ŋui-であり、(Ul), (Na)の方が古い二重母音を保っているようである。

(S)ǰigə-, (Ek2)ǰigə-, (U)ǰi-と同源の語はC.によれば(S), (Ut)を除く全ツングースにあり、「細かく切る、割る」などの意であるが、(J)ǰisu-は「する、用意する」の意である。朝克（1995, 1997）でもあがっているので、(S)では主にこの語が使われることは間違いない。

(U)kusigusi-, (Oc)kuǩəli-は「ナイフ」より派生したもので、C.によればさらにⅢ群の三言語と(Ma)に同様の動詞がある（(26)「ナイフ」の項も参照）。

(U)xuai-と同源の語はC.によれば(S)を除くⅠⅡ群に「切る、切り放す、切り倒す」の意である（(Ek)xoog-, (Ew)xoon-, (Oc)xoi-など）。(Na)はクル・ウルミ方言だけなので、やはりⅢ群にはないと見てもよいだろう。

(Na)caaso-と同源の語はC.によれば(Na)の他に(Ul)ǩasu-/ǩasi-「細かく切る、切り取る」があるだけである。他方(Ut)ǩigasu-についてはC.に記載がない。 (Ut)xamaǩiga, (Na) xamaǩaa「どんな」や(Ut)koliga(n), (Na)kolaan「虫」などを見てもわかるように、(Ut)は比較的母音間の g を保存しているので、(Ut)ǩigasu-も同源の語と考えたい。

(Ut)ǩiŋguli-は不明。

(Ut)xoo-と同源の語はC.によれば(Ek)ogo-「木を切り倒す」、(N)ogo-「刃物で怪我をする」、(Ul)xoo-「切断する」、(Ut)xoo-「切断する」、(Na)クル・ウルミ方言xoi-「切り取る」である。

(Ma)faita-と同源の語はC.によれば全ツングースにあり、ⅠⅡ群のxa/xaa/xaan、Ⅲ群の

poo-ñi/paañi/poañi（意味は皆「部分」）と同源の語とみている。

(Ma)sači-と同源の語はC.によれば(Ek)čapčii「木片」、(S)sarči-「切断する」、(N)čapča-/čapči-「壊す」、(U)čapča-「薪を割る」、(Na)čapči-「薪を割る、切断する」である。Ⅲ群の中で(Na)だけにあるのが妙である。

(Ma)furu-と同源の語はC.によれば(Ek)、(Ew)、(N)、(Ul)、(Na)、(Ma)にあり、(Na)を除いて「細かく切る、細かく砕く」の意である。(Na)purtuは「細片、かけら」で、また(N)には(Ul)から入ったとしている。

(153)[362]つくる（作る）		(Hz)awu-		(J)---
(Ew)oo-	(Ek1)bələkə-	(U)oo-	(Na)aggo-	(Si)arə-/veilə-
(S)oo-	(Ek2)oo-	(Oc)oo-	(Ut)andu-	(Ma)ara-/wəilə-

(Ek1)bələkə-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあり、皆「準備する」の意で、さらに(lit.Mo)beledke-「準備する」が比較されている。

(Na)、(Ut)にみられる語形と同源の語はC.によれば他には(Ul)にあるだけで、つまりはⅢ群に特徴的な語ということになる。(Ma)ara-と同源の語はC.によれば(J)にあるだけで、こちらはⅣ群に特徴的な語ということになる。

(Hz)awu-は、Zhang et al.(1989)ではɔu-となっているので、(Ew)oo-をはじめとする語と同源のものであろう。これらと同源の語はC.によれば全ツングースにあるが、ⅠⅡ群では変化語尾の違いなどにより、「作る、する（？）」と「なる」の両方の意味を持っているのに対し、Ⅲ群と(Ma)では「作る、する（？）」の方の意味がない。なおC.が(J)での同源語としてあげているのはo-fi「なぜなら・・・である（？）」である。

(Ma)wəilə-と同源の語はC.によれば(Ek)、(Ew)、(Ul)、(Ut)、(Na)、(Ma)にあるが、(lit.Mo)üile「仕事、行為」から(Ek)、(Ew)にはヤクート語を経由して、他には(Ma)を経由して入ったものであるとしている。

(154)[363]あける（開ける）		(Hz)nəi-		(J)---
(Ew)aaŋa-	(Ek1)kaalga-	(U)giəntilə-	(Na)ñixəli-	(Si)li-
(S)naŋi-	(Ek2)ñii-	(Oc)ñii-	(Ut)ñii-/tura-	(Ma)nəi-

(Ew)aaŋa-と同源の語はC.によれば(Ek)、(S)、(Ew)、(N)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にあるが、(Ek)aŋa-では「動物が口を開ける」、aŋa「動物の口」、Ⅲ群の三言語では「引き金を上げる」、(U)aŋgalaは「瓶」（＜(Ma)）としている。(Ma)の語形があがっていないのでしらべてみると、(Ma)aŋara「瓶」（羽田 1937）となっている。C.はさらにこれを(lit.Mo)anGai-「物の間があく、（口などを大きく）開く」と比較している。

(S)naŋiと同源の語はC.によればⅠ群の四言語にしかなく、それぞれの言語で(Ek)laŋi-「開ける、広げる」、(Ew)naŋi-「テントの覆いを取る」、(N)laŋisin-「広げる、伸ばす」のような意味になっている。

(Ek1)kaalga-は、次の(155)「閉める」の(Ek1)kaa-から派生した語で、C.によればこれと同源の語は(Ek)、(S)、(Ew)、(Ul)、(Ut)、(Na)、(Ma)にある。(Ew)ではkaalgш-「閉める」があり、Ⅲ群では皆「絞め殺す、窒息させる」の意である。C.ではさらに(lit.Mo)qaGa-「閉める」を比較し、(Ek)、(S)、(Ma)にみられる語形はここから直接入ったものと

みている。(Ek2), (U), (Hz), (Oc), (Na), (Ut), (Si), (Ma)にみられる諸形は互いに対応するものと考えられる。C.によればこれらと同源の語は(S)と(Ew)と(J)を除く全ツングースにあって、意味は皆「開ける」である。上にもみるように(U)と(Na)の語形が少し変わっている。C.はさらに(lit.Mo)nege-「開ける」を比較している。

(Ut)tura-と同源の語はC.によれば(J)を除く全ツングースにあって、(Ek), (Ew), (N), (Oc), (Ul)では「口を開ける」の意である。これに動物を示す接辞-kiがついた形に由来するものが、(Ek), (S), (Ul), (Na)では「コクマルガラス」、(Ek), (S), (Ew), (N), (U)では「カラス」、(Oc), (Ut), (Na), (Ma)では「ミヤマガラス」の意を持っている。

(155)[364]しめる（閉める）		(Hz)gida-		(J)---
(Ew)ŋipkш-	(Ek1)kaa-	(U)kimpi-/likpigi-	(Na)dasi-	(Si)jaxəši-/jaxəsə-
(S)tiri-	(Ek2)sam-	(Oc)lakči-	(Ut)somi-	(Ma)jaksibu-

上記の(Ew), (U)にみられる語形と同源の語はC.によれば(S), (Ma), (J)を除く全ツングースにあり、(Na), (Ul)は「遮る、道をふさぐ」、その他の言語では「穴を塞ぐ、閉じる」である。

(S)tiri-はC.では(S)tir-/tirə-「押さえつける」としてあがっており、これと同源の語は(U)と(J)を除く全ツングースにあるが、(Ma)を除いて「押さえつける」の意である((Ma)čirgə-は「弓の弦をはずす、土をつき固める」)。朝克（1997）では「押さえつける」もtiri-となっているので、同じものとみてよいだろう。

(Ek2)sam-, (Ut)somi-と同源の語はC.によれば(Ek)soom-, (Ew)xoom-, (N)soom-, (Ul)somi-, (Ut)somi-, (Ma)somi-, (J)somi-で、意味は(Ma), (J)は「隠れている」だが、それ以外は「閉じる、（戸、窓を）閉める」である。

(Hz)gida-と同源の語はおそらく(Ma)gida-「相手の肩をつかんで下に押さえつける、人、事を隠す、演物を演ける、敵陣を破る」（羽田 1937）であろう。この他にC.によれば全ツングースにgidaの形で「槍」を意味する語があるが、これは別の語源に遡るものではないか。C.でも先の(Ma)gida-は別項目に扱っており、(Ma)にのみあがっている。

(Na)dasi-と同源の語はC.によれば(S), (U), (J)を除く全ツングースにあがっている。

上記の(Na), (Si), (Ma)にみられる語と同源の語はC.によれば(N)lakči-「閉める、家を全箇所閉める」、(Oc)jakči-/lakči-「戸を閉める、鍵をかける」、(U)jakčigi-「戸につっかえ棒をする」、(Ul)jaklu-/jaksi-/jakču-「鍵をかける」、(Na)jakči-「閉める、鍵をかける」、(Ma)jaksi/ǰaksi-「閉める、かんぬきをかける」である。

(156)[365]すむ（住む）		(Hz)aŋkulə-		(J)---
(Ew)iin-	(Ek1)bi-	(U)bagdi-	(Na)bi-/balǰi-	(Si)te-
(S)təgə-	(Ek2)uriin-	(Oc)bi-/bagdi-	(Ut)bi-	(Ma)tə-

(Ew)iin-と同源の語はC.によれば、まずⅠ群の(S)を除く三言語にin-/iin-「生きる」があり、(S)にもiŋirgə-/inərgə-「生き返る」がある。Ⅱ群には(Oc)iŋi/iniji/inihi, (U)iŋigi「生きている」があり、あとは(Na)クル・ウルミ方言にiŋkii「生きている」がある。他方「生きている」は、(Na)でujunであるが、これと同源の語についてC.をみると、Ⅲ群の三言語と(Ma)wəjxun「生きている」しかなく、ちょうど相補分布をなしている。ⅠⅡ群

のiとⅢ群のuが対応することを考えると、これらは対応するものである可能性が考えられよう。

(S), (Si), (Ma)にみられる語形は(142)で全ツングースにみられた「座る」である。C.をみる限りでは、さらに(Ek)にのみ「住む」の意が記されている。

(Ek1)などのbi-は(173)「ある」を、(U)bagdi-, (Na)balǰi-などは(158)「産む」、(159)「生まれる」を参照。

(Ek2)uriin-と同源の語はC.によれば(Ek)uriin-「(住居の移動において)留まる、滞在する」、(Ew)ərin-「移動の道中で留まる、テントを建てる」があり、(S)にはこれからの派生語と思われる(S)uriilən「家族、戸(こ)」があって、その分布はⅠ群に偏っている。

(Hz)aŋkulə-と同源の語はC.では(Ek)aa-「寝る」の項目のもとに見いだされる(Na)aoŋko「寝ぐらの場所、寝室、寝床」、(Na)ビキン方言aaŋko/aaŋku「小屋」、クル・ウルミ方言aŋko「小屋」である。-laがついた動詞形は他の言語にはなく、(Hz)にしかないようである。ビキン方言とクル・ウルミ方言だけに形、意味共に近い形がみられるのは、この三言語が風間(1996a)で述べた「アムール中流域言語圏」をなしているためと考えられる。

(157)[393]かぞえる(数える)	(Hz)tolo-/bodo-			(J)---
(Ew)taŋa-	(Ek1)taŋi-	(U)taŋi-	(Na)taon-	(Si)tolə-
(S)taŋii-	(Ek2)taŋi-	(Oc)taŋi-	(Ut)taun-	(Ma)tolo-

(Ew), (Na)等にみられる諸形については(151)「読む」の項参照。

(Si)tolə-, (Ma)tolo-について、C.では(Ek)toolo-(<(Mo))「数える」とあるのみで、(Ma)の形はあがっていないが、やはりモンゴル語((lit.Mo)toγala-, (Mo)toolo-「数える」)から入ったものであろう。

(Hz)bodo-と同源の語はC.によれば(Ek)bodo-(<(Mo))「考える」、(S)bodo-(<(Mo))「考える」、(Oc)budu-「決める」、(U)bodo-「考える、みなす、数える」、(U1)bodo-「数える」、(Ut)boddo-/bodo-「考える」、(Na)bodo-「考える、数える、考えに入れる、決める」、(Ma)bodo-「考える、考えつく、計画する、数える、境界をつける」である。小沢(1983)によれば(Mo)bobo-((lit.Mo)bodu-)「考える、計算する、志す」である。(Ek)以外は(Mo)から(Ma)にいったん入り、そこから広まったものだろうか。

(158)[394]うむ(産む)	(Hz)baldi-			(J)---
(Ew)bak-	(Ek1)baldi-	(U)jatasi-	(Na)baa-	(Si)banǰi-/banǰə-
(S)baldi-	(Ek2)baldi-	(Oc)bagdi-	(Ut)baa-	(Ma)banǰi-

(Ew)と同源の語はC.によれば「見つける」の意で((J)だけはその意味の明記なし)全ツングースにあり、(Ew), (Oc), (U), (Ut), (Na)に「産む」の意味の記載がある。

(S)baldi-, (Ma)banǰi-をはじめとする語と同源の語はC.によれば全ツングースにあり、(J)以外の全言語に「生まれる、育つ」の意がある。また(J), (Ew)を除き「暮らす」の意がある。他方「産む」の意はⅠ群の四言語に記載があるが、ⅡⅢ群にはなく、(U1), (Na)では使役の接辞によって態を転換した派生語に「生む」の意がみられる。

(U)jatasi-と同源の語はC.によれば(N)jatawu「分娩小屋」、(Oc)jaataŋko「出産による女性のけがれ」、(U)jata「(生理の)血」、jatasi-「産む」、jata(')u「分娩小屋」、

(Ut)jaata-「産む」、(Na)クル・ウルミ方言jaata「（一族についての）分離」である。

(159)[395]うまれる（生まれる）	(Hz)---			(J)---
(Ew)bakap-	(Ek1)baldi-	(U)bagdi-	(Na)balǰi-	(Si)banǰi-/banǰə-
(S)baldi-	(Ek2)---	(Oc)bagdi-	(Ut)balǰi-	(Ma)banǰi-

(Ew)bakap-は、baka-「見つける」より受動（自発）態の接辞-pによって「見つかる」を派生したものである。

(160)[397]しぬ（死ぬ）	(Hz)budə-			(J)buǯə-
(Ew)aǯǯa oo-/kəkə-	(Ek1)bu-	(U)budə-	(Na)bur-	(Si)beǯə-
(S)bu-	(Ek2)bu-	(Oc)bu-dəi/bu-kki	(Ut)bul-	(Ma)buǯə-

(Ew)aǯǯa oo-は「なく なる」で人間の場合は普通こちらを使い、一方kəkə-は動物などに使うという。C.によればkəkə-と同源の語は他には(Ek)kukəlǯəə「瀕死の、死にそうな」があるだけである。

その他の言語の諸形と同語源の語はC.によれば全ツングースにあるが、(Ew)だけは(Ew)buñi「死者」、buñikən「冥界」など他の言語の「死ぬ」のような語形から派生したと思われる語しか存在せず、他の言語の「死ぬ」と直接対応する語がない。

(161)[[402]あう（会う）	(Hz)---			(J)---
(Ew)bakaldɯ-	(Ek1)bakaldii-	(U)ba(')asi-/asali-	(Na)aǯan-	(Si)aǯə-
(S)baxaldi-	(Ek2)---	(Oc)baaǯi-	(Ut)ataali-/baali-/baa-	(Ma)aǯa-

(Ew)、(S)、(Ek1)にみられる諸形は、例えば(Ek1)ならbaka-「見つける」に相互態の-ldiiがついてできたものである。C.によればこれと対応するⅡⅢ群の形は、(Oc)bagaǯe-/baǯi-、(U)b(')agdi-、(Ul)baaǯi-/baaǯu-、(Ut)bagaǯi-、(Na)baaǯi-であり、意味は皆「会う」である。このうち(U)b(')agdi-は*bakaldi-より-ld->-gd-の変化を経てできたもので、Ⅰ群の諸形と対応する。他方上記の(U)ba(')asi-は(Na)baaǯi-のようなⅢ群的な語形から-ǯ->-s-の変化を経たような形を示している。

(Ut)baali-はC.にもなく、不明。baa-「見つける」からか。

(U)、(Na)、(Ut)、(Si)、(Ma)にみられる語と同源の語は、C.によれば(J)を除く全ツングースにあり、ⅡⅢ群では(Ut)を除きaǯa-（(U)はasa-）の形で「合う、適う」の意である。さらに(Oc)aǯali-、(U)asali-、(Ul)aǯali-、(Ut)ataali-、(Na)aǯamboali-のように-liがついた形で「会う」の意になっている。他方Ⅰ群では(Ek)arǯa-、(S)arǯaa-、(Ew)arǯaldɯ-、(N)alǯaldii-/atǯaldii-のようにrの要素を持ち、意味はもっぱら「会う」であるという。Ⅳ群の満州語では両方あり、(Ma)aǯa-「会う、合う、当たる」、arǯa-「獣の先回りして撃つ、路を断つ」の意であるという。

(162)[408]おく（置く）	(Hz)kinda-			(J)iliš̌u-
(Ew)nəə-	(Ek1)nəə-	(U)nədə-	(Na)nəə-	(Si)sənda-/š̌inda-
(S)nəə-	(Ek2)nəə-	(Oc)nəə-	(Ut)əksə-	(Ma)sinda-

(Hz)kinda-は(Ek)tiin-, (Na)činda-, (Ma)sinda-などの語形で(J)を除く全ツングースにある「放す」だろうか。C.でも(Ma)sinda-では「放す」の他に「置く」の意味がみられる。(Na)でkiŋdaa-は「砕ける、折れる」であって、これと同源の語はC.によれば(Ek), (Oc), (Ul), (Ut)にあるが、これは別語源だろう。

(Ut)əksə-と同源の語はC.によれば(Ek)əkčə-「持ってくる、持っていく、とっておく、保存する」、(Ut)əksə-「とっておく」、əksəpsi/əksəpsuli「危ない」、(Oc)əksən「狼」である。(Ek)などでŋəələ-「恐ろしい」から「狼」が派生された例があるので、同語源とみる根拠はある。

(J)iliǰu-についてC.は(Ek)il-をはじめ全ツングースにある「立つ」を比較し、「据える、立たせる」と考えている。

(S)nəə-をはじめとする諸形と同源の語はC.でもやはり(Ut)とⅣ群を除く全ツングースにあがっている。次の(163)「出る」でみるように、(Ut)ではč>t, ǰ>d, ň>nの変化が起きたために、(Na)ňiə-, (Ul)ňiə-/ňəə-が(Ut)nəə-となっている。ひょっとするとこの語との同音衝突を避けるために、nəə-が用いられなくなったのかもしれない。

(163)[410]でる (出る)		(Hz)ňuŋə-		(J)tuti-
(Ew)ňuu-	(Ek1)juu-	(U)ňuu-	(Na)ňiə-	(Si)tiučі-
(S)juu-	(Ek2)juu-	(Oc)ŋəi-/ňuu-	(Ut)nəə-	(Ma)tučі-

Ⅰ Ⅱ Ⅲ群にみられる諸形は同源のものと考えられるが、C.でもやはりⅣ群を除く全ツングースに「でる」の意であがっている。

逆に(Ma)tučі-と同源の語はC.によれば(Ma)と(J)の他は(Ek)turku-「(開けた場所へ)出る」があるのみである。

(164)[411]はいる (入る)		(Hz)niŋə-		(J)iri-
(Ew)ii-	(Ek1)ii-	(U)iigi-	(Na)ii-	(Si)diuǰi-
(S)ii-	(Ek2)ii-	(Oc)iigi-	(Ut)ii-	(Ma)dosi-

(Ew)ii-をはじめとする諸形と同源の語はC.では全ツングースに「入る」の意であがっており、(Ma)(シベ語)にもjubə-「出る」があがっている。他方山本(1969)にはこの語はあがっていない。C.は(J)iri-も同源とみて同じ項目にあげ、さらに(lit.Mo)ire-「来る」も比較している。

(Ma)dosi-についてC.は全ツングースにあるdoo「内、中」と同源のものと考え、同じ項目のもとに扱っているが、「入る」のような意味で派生した動詞を持っている言語は他にない。

(165)[412]くる (来る)		(Hz)əmə-		(J)di-
(Ew)əm-	(Ek1)əmə-	(U)əməgi-	(Na)ǰi-	(Si)ǰi-
(S)əmə-	(Ek2)əmə-	(Oc)əmə-	(Ut)sinda-	(Ma)ǰi-

(Na)及びⅣ群にみられる諸形と同源の語はC.によればやはり(Ul), (Na), (Ma), (J)のみにある。C.では(Ul)ǰi-となっており、Petrova (1936) もǰi-となっているが、 Sunik (1985) はdi-である。筆者が現地で調査した範囲ではどのインフォーマントもdi-であっ

た（風間 1996bのテキストにも多くの例がある）。

(Ut)sinda-はなぜかC.にその記載がない。池上（1994）によれば(Ut)北方言でもsinda-が使われているようである。Petrova（1967）では「来る」はxinda-として採っているようだ（Petrova 1967, p.131, l.9など、テキスト中にある）が、この形でもやはり記載がない。したがって他の言語との対応を明らかにすることができなかった。

(Ek)əmə-をはじめとする諸形と同源の語はC.によればやはりⅠⅡ群にしかない（(Na)クル・ウルミ方言を含む）。意味はどの言語も「来る」である。

(166)[413]いく（行く）		(Hz)ənə-		(J)gənə-
(Ew)gən-	(Ek1)nənə-	(U)gənə-	(Na)ənə-	(Si)genə-
(S)ǩinə-	(Ek2)xuru-	(Oc)gənə-	(Ut)gənə-	(Ma)gənə-

(Ek2)xuru-と同源の語はC.によれば(Ek)suru-/xuru-/šuru-,(Ew)xər-（意味は共に「去る」）と(N)səjiwuk「（花嫁の）持参金」である。

(167)[416]うごく（動く）		(Hz)---		(J)ačidu-
(Ew)xogɯw-	(Ek1)gurgəl-	(U)gənə-	(Na)tuigku-	(Si)ači-
(S)guggəl-	(Ek2)xawal-	(Oc)---	(Ut)tuttu-	(Ma)aššəšə-/aiči-

C.によれば(Ew)xogɯw-と同源の語は他の言語になく、(Ew)xoγnə-「動く、かすかに動く、揺れる、（赤ん坊が）這う」（Novikova 1980でもこの形であがっている）だけがその項目のもとにはあがっている。

(S)guggəl-, (Ek1)gurgəl-と同源の語についてC.は(S)gurgəlbuu-「動かす」、(Ew)gurgəl-「動く、揺れる、震える」しかあげていないが、調査から(Ek)にもあることがわかったし、C.における(S)の語形は接辞-buuによって他動詞化したものであって、派生のもとになった自動詞があることもわかった。

(Ek2)xawal-と同源の語は(Ek)xawaa「仕事」、xawal-「働く」、(Ew)hawa「仕事」、xawad-「働く」、(N)xawaadakta-「働く」、(Na)pasali-「頑張る、努力する」、(Ma)faššа-「頑張る、努力する」である。

(U)では他のインフォーマントからはugi-という語が得られたが、これと同源の語はC.によれば(U)ugi-「揺れる、動く」の他には(Oc)uggi-「揺れる、動く」があるだけで、これはⅡ群に特徴的な語ということになる。

(Na)tuigku-と同源の語はC.によれば(Ew)tugkə-「（そうっと）叩く、押す」、(N)tumku-/tugku-「動く、揺れる」、(Ul)tujnčulbu-/tunču-「動かす、揺らす」、(Na)tuigku-「動く、揺れる」である。

(Ut)tuttu-と同源の語について、C.は、他の言語にないとみなし、(Ut)tutči-「揺れる、揺れ動く」のみで一つの項目をたてている。しかし、(Ut)では無声子音の前で鼻音はその鼻音性を失い同じ調音点の無声破裂音になるという変化が起きているし、i 以外の前では t は t になったので、前述の(Ul)tunču-のような語形から（Ut)ではtunču-> tuntu-> tuttu-のような変化が予想される。したがって(Ut)tuttu-は(Na)tuigku-と同源である。なお池上（1997）によれば(Ut)tuttu-の意味は正確には「動く、動かす」である。

(Ma)ači-をはじめとする諸形と同源の語はC.に記載がない。ači-「荷を負わす」はある

が、これは別語源のものだろう。羽田（1937）でもaǰi-は「荷を負わす」の意しかないが、福田（1987）にはaǰi-「(1)揺れる、軽く動く (2)荷を負わす (3)荷作りをする」となっている。

(168)[418]あたえる（与える）	(Hz)bu-			(J)---
(Ew)buu-	(Ek1)buu-	(U)bu-	(Na)buu-	(Si)bu-/šelə-
(S)buu-	(Ek2)buu-	(Oc)buu-	(Ut)bee-	(Ma)bu-/šələ-

C.及びNovikova（1980）によれば(Ew)オラ方言ではではbee-「与える」となっている。

(Si)šelə-は山本（1969）によれば、「ただでやる、貸してやる」であり、(Ma)šələ-も羽田（1937）によれば「ただでやる」の意だが、C.によればこれと同源の語は他になく、(Ma)の語形のみがあがっているが、さらにこれを漢語「捨[3]」から入ったものとしている。

(169)[419]する	(Hz)---			(J)ǰisu-
(Ew)ŋik-	(Ek1)oo-	(U)---	(Na)ta-	(Si)arə-
(S)oo-	(Ek2)oo-	(Oc)---	(Ut)o-	(Ma)ara-

(Ew)ŋik-と同源の語はC.によれば(Ek)ŋakə-, (Ew)ŋak-, (N)ŋəxə-, (Oc)ŋəə-, (U)ŋəxə-があり、意味は皆「する、（何かに）従事する」である。筆者も他のインフォーマントからは(U)ŋəxə-を採ることができたし、風間（1996b, p.113）では(Oc)jaa-wa ŋə-i-si「何を しているの」を記録している。したがってⅠⅡ群、特にⅡ群で用いられる語とみなすことができる。

(S)oo-などについては(158)「作る」の項参照。

(Na)ta-と同源の語はC.によれば(Ul)ta-/ti-「する、・・・である（コピュラ）、副動詞形を受ける一種の助動詞」、(Na)ta-（意味は(Ul)に同じ）、(Ut)to-「する」、(Ma)tafurša-「大いに発奮する」である。ⅢⅣ群、主にⅢ群で用いられる語ということができる。池上（1997）によれば(Ut)to-は「（なにか）する、性交をする」となっている。なお安（1986, p.58-60）から、(Hz)ではda-（(Na)のta-に対応するものであろう）が、コピュラ及び副動詞をうける助動詞としてよく使われていることがわかる。

(Ma)ara-と同源の語はC.によれば(J)lalu mutəburu「記述する」のみである。(J)ǰisu-については(152)「切る」の項参照。

(170)[420]おもう（思う）	(Hz)goŋi-			(J)---
(Ew)mulgat-	(Ek1)bodo-	(U)məisi-	(Na)murǰi-	(Si)Goŋi-
(S)bodo-	(Ek2)duumaj-	(Oc)məiǰi-	(Ut)mereǰi-	(Ma)gūŋi-

C.によれば(Ew)mulgat-と同源の語は(Ek)mulgiit-「ずるくふるまう」、(Ew)muulgwt-「考える、決める、想像する」だけである。(S)bodo-などは(157)「数える」の項参照。

(Ek2)duumaj-はロシア語からである。

(U)məisi-と同源の語はC.によれば、(Ek)mərgə-, (Ew)mərgw-, (N)məjgə-, (Oc)məjǰi-, (U)məisĩ-（以上意味は皆「思う」）、(Ul)məxə-「気づく、感づく」、(Ut)mərgə「賢い」、(Na)məxə-「気づく、感づく」、(Ma)mərki-「思いつく、察する」である。

その一方で(Na)murǰi-と同源の語はC.によれば、(Ew)muraǰ「精神力、幸運」、(Oc)

muiči-「思う、考える」、mujuŋku「賢い」、(Ul)murun「心」、muruči-「思う、考える、決める」があり、(Ut)、(Na)は(Ul)と同様の状況である。

(Ma)gūñi-については(130)「言う」の項参照。

(171)[421]しる（知る）	(Hz)sa-		(J)sa-
(Ew)xaa-	(Ek1)saa-	(U)saa-	(Na)saa-	(Si)sa-
(S)saa-	(Ek2)saa-	(Oc)saa-/təmnə-	(Ut)saa-	(Ma)sa-

(Oc)təmnə-と同源の語はC.によれば(Ek)tumnaači「賢い」、(N)tumkun「賢い」、(Oc)tumnə-「わかる」である。

(172)[422]できる	(Hz)ulxi-		(J)dugi
(Ew)xaa-/ət-	(Ek1)ətə-	(U)ñoñi-/mutə-/əgǰə-	(Na)otoli-/mutə-	(Si)mutə-/mutu-
(S)ətə-	(Ek2)sataa-	(Oc)təmnə-	(Ut)utuli-	(Ma)mutə-

(Ew)ət-、(S)ətə-、(Ek1)ətə-と同源の語はC.によれば(Ek)ətə-「止める、終える」、(S)ətə-「終える、する時間がある、状況的にできる」、(Ew)ət-「打ち負かす、状況的にできる」、(N)ətə-「止める、終える」、(Oc)ətə-「状況的にできる」、(U)ətə-「勝つ」、(Ul)xətə-「勝つ」、(Ut)xətə-「勝つ、納まる」、(Na)xətə-「勝つ、納まる」、(Ma)ətə-「勝つ、状況的にできる」、ətəgi「強い、勇ましい」である。

(Ek2)sataa-と同源の語はC.によれば(Ek)sataa-、(Ew)xataa-（意味はともに「能力的にできる」）のみで、ヤクート語から入ったものと明記している。

(Hz)ulxi-は安（1986）の訳では「わかる（懂dong[3]）、状況的にできる（会hui[4]）」となっているが、C.には見当たらず、その出自は不明である。

(U)ñoñi-「能力的にできる」はC.によれば(U)にあるだけである。

(U)、(Na)のmutə-と同源の語はC.によればやはりmutə-の形で(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)、(Ma)にあり、「状況的にできる」の意味であり、また(J)mutəburu「作る、終える、実行する」、(Na)クル・ウルミ方言mətə-「状況的にできる」を同源の語としてあげている。ク・ウルミ方言に違う形があるのが気になるが、ほぼアムール下流域型の分布をしているし、語形も意味も均一であることからみて、(Ma)から下流へ広まった可能性が考えられる。

(Na)otoli-、(Ut)utuli-と同源の語は「わかる、理解できる」の意で(Ew)、(N)、(Ul)、(Ut)、(Na)にあり、そのうち(N)、(Ul)、(Na)には「能力的にできる」の意が明記されている。またさらに(Ma)utulixəku「話の要領を得ない、曖昧な、合点のいかない」（意味は羽田 1937による）を同源の語としてあげている。

(J)dugiと同源の語は不明。

(173)[424]ある	(Hz)bi-		(J)bi-
(Ew)bi-	(Ek1)bi-	(U)bi-	(Na)bi-	(Si)bi-
(S)bi-	(Ek2)be-	(Oc)bi-	(Ut)bi-	(Ma)bi-

(174)[426]ない	(Hz)anči		(J)asuwi
(Ew)ačča	(Ek1)aačin	(U)anči	(Na)abaa	(Si)aqu

(S)aaŝin	(Ek2)aačin	(Oc)maaki	(Ut)anaa	(Ma)akū

(Ew), (S), (Ek1 2), (U), (Ma), (J)にみられる諸形をC.は同源の語とみなし同じ項目にあげ、他方(Na)abaaは別項目にたて、(Si)aba「ない」のみを同源の語としてあげている。

(Ut)anaaと同源の語はC.によれば同様の語形で(Ew)（アルマン方言）, (Oc), (Ul), (Ut), (Na)があるが、(Ut)以外は「～なしで、～がなくて」のように述語ではなく、文中では副詞的に使われる句を形成するのが普通であるようだ。

(Oc)maakiと同源の語はC.によれば(Ek)maja-「（宗教的な語）獣がわなにかからなくなる、狩りで運がない」、majin/majan「不成功、失敗（狩りの）」、(Ew)maj「予感、胸騒ぎ」、(N)maja-「魚や獣が捕れない」、(Oc)majmaki-, maki(n)「ない」、(Ut)maja-「魚や獣が捕れない、運がない」、(Na)maña-「捕れない、運がない、無くなる、尽きる」、(Ma)maja-「消えて無くなる、消滅する」である。

ここには現れていないが、(Ul)ではkəwə「ない」、(Na)下流方言ではkəwkə「ない」という語が用いられる。C.によればこれと同源の語は(N)k'ewk'e「全く、すっかり、あたり一面に」、(Oc)kowak「（擬声語）完全に」、(Ul)kauka bi-i「じっとしている」、kəwə「ない」、kəwə o-「消えて無くなる」、(Ut)kəkku「空の」、(Na)（ナイヒン方言）kəwkə「ない」、kəwkəgdə o-「消えて無くなる」である。しかしOnenko (1980) を見る限りではC.のあげる(Na)の諸形は見あたらない。(Na)kaokaa「何もせずにじっと」は見いだされる。

(175)[427]おおきい（大きい）	(Hz)sagdi		(J)amban
(Ew)əgǰən	(Ek1):əgdəgə	(U)sagdi	(Na)daai	(Si)amə/anbuu
(S)boŋgon	(Ek2)xəgdi	(Oc)sagdi	(Ut)daaji	(Ma)amba

(Ew), (Ek1 2)にみられる諸形と同語源の語はC.によれば (Ek)xəgdi「大きい」、(S)əgduug「大きい」、(Ew)əgdɯ「大部分、（量が）大きい、大きい」、(N)əgdi, (Oc)əgdi, (U)əgdi, (Ul)əgdi, (Ut)əgǰi, (Na)əgǰi ((N)以下の意味は皆「多い」) である。ここで(Ek)だけに語頭に x-が見いだされるのは通常の対応に合わない。同じ項目のもとにあがっている派生語xəgdig「年寄の、主たる、長」、xəgdiŋə「大きい、大人の、年寄の」などの存在を考慮すると、むしろ次にみるsagdiと関係がある可能性もある。

(S)boŋgonはC.になく、不明。

Ⅱ群の三言語にみられる諸形と同源の語は、C.によれば全ツングースにあり、同様の語形で ((Ma)ではsakda、(J)ではsalada) 、ⅠⅢⅣ群では「年寄の、老いた」の意で用いられる。

(Na), (Ut)にみられるdaai, daajiと同源の語はC.によれば(Ul), (Ut), (Na), (Ma), とⅢⅣ群にしかなく、意味は皆「大きい」である。ただし羽田 (1937) には(Ma)daiという語は存在せず、福田 (1987) にも漢語「大」しか記載はない。したがって漢語から入って広まった可能性も考えられる。

(Ma)ambaなどと同源の語はC.によれば(N)amban「悪い霊、悪魔」、(Oc)amba「悪い霊、虎、とても」、(U)amba「悪い霊」、(Ul)amban「悪い霊、虎、大きい、とても」、(Ut)amban「悪い霊、悪魔」、(Na)amban「悪い霊、虎、かなり、大きい」、(Ma)amba「大きい」、(J)amban「大きい」である。

(176)[428]ちいさい（小さい）　(Hz)uškuli　(J)oson

(Ew)kučukən　(Ek1)ńiiči　(U)ŋičaa　(Na)nuuči　(Si)ajigə

(S)ńisxun　(Ek2)uša/ušakan　(Oc)ŋučkuńi/ŋiiči(Ut)nuuči　(Ma)ajigə

C.によれば(Ew)kučukənと同源の語は他の言語になく、他方でヤクート語のkaččaa-「小さくなる」、kaččygyi「小さい」と比較している。

(S)、(Ek1)、(Hz)、(U)、(Oc)、(Na)、(Ut)にみられる諸形と同源の語は、C.によれば(J)を除く全ツングースにあり、(Ma)isuxun「弱い、小さい（子供が）」を除いて皆「小さい」の意である。

(J)osonと同源の語はC.によれば(Ma)osokon「小さい」だけがあがっているが、上記の(Oc)ŋučkuńiなどと対応する可能性もあるのではないか。

(Ek2)uša/ašakanと同源の語はC.によれば(Ek)usa「悪い、少ない」、(Ew)us「意地悪な、怒りっぽい」、(N)osa「意地悪な、わるい」、(U)was(')a「少ない」、(Ma)osxa/osxon「意地悪な、残酷な」、(J)usgaburən「怨み、憎み」である。

(Ma)ajigəと同源の語はC.によれば(Ek)aajin「第一子」、(Na)aji bonggodu「最も初めに」、(Ma)aji「第一子」、ajigə「小さい」である。

(177)[437]つよい（強い）　(Hz)---　(J)xatan

(Ew)əŋi　(Ek1)bukuu　(U)maŋga　(Na)masi　(Si)etəŋə/itiŋi/audun/xusuŋə

(S)xusuši　(Ek2)sootmal　(Oc)maŋga/kusuŋki/masi(Ut)maŋga/masi(Ma)ətəŋi/akdun/xūsuŋə

(Ew)əŋiと同源の語はC.によれば(Ek)əŋəsii「力、力持ち、強い、強く、とても」、(Ew)əŋi「力、力持ち、強い」、(N)əŋəsin「強い」、(Ut)ənəjəə「とても」である。ここでの(Ut)ənəjəəは(Na)にも同様のものがあるが、感嘆詞であり、ここで比較すべきものではないだろう。したがってこの語形はⅠ群に特徴的なものということになる。

(S)xusu-ši、(Oc)kusuŋ-ki、(Si)xusu-ŋə、(Ma)xūsu-ŋəは「力-持ちの」という構成になっていると考えられる。これらと同源の語はC.によれば(Ek)kučitəj（＜(Mo)）「強い、力持ち」、(S)xusuši「強い」（なお朝克 1995によれば(S)で「力」はtəŋkəで、xusuという語はない）、(Ew)kuussi（＜ヤクート語）「むりやりに」、(N)kusun、(U)ku(h)i、(Ul)kusun、(Ut)kusun、(Na)kusun、(Ma)xusun（(N)以下の意味は皆「力」）である。さらにC.は(lit.Mo)küčün「力」を比較している。

(Ek1)bukuuと同源の語はC.によれば(Ek)、(S)、(Ma)にあるが、それぞれ(lit.Mo)bökə「力持ち、闘士」から入ったものとしている。

(Ek2)sootmalと同源の語はC.によれば(Ek)soo「強い、意地悪な、怒りっぽい、とても」、(Ew)soo「とても、強い、大きい、すごい、力」、(N)soo「とても、かなり」であり、(Ek2)sootmalは比較級の-tmalがついたものとみることができる。

(U)、(Oc)、(Ut)にみられるmaŋgaと同源の語はC.によれば、(Ek)maŋa「硬い」、(S)mandee「つらい、重い（？）」、(Ew)maŋ「硬い、難しい」、(N)maŋga「硬い、強い、貴重な」、(Oc)maŋasi「硬い」、maŋga「強い」、(U)maŋa(h)i「硬い、（舟など）進まない」、

maŋga「つらい、値が高い、わるい、強い、とても」、(Ul)maŋga「つらい、しんどい、はげしい、強い」、(Ut)maŋga「硬い、強い、とても、闘士、富者」、maŋgauli「硬い」、(Na)maŋga「つらい、しんどい、強い、とても」、(Ma)maŋga「硬い、つらい、強い」、(J)maŋga「つらい、難しい」である。

(Na)、(Ut)にみられるmasiと同源の語はC.によれば(N)、(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にmasiの語形であり、意味は「丈夫な、強い」であり、また(Ek)にmanñii「丈夫な、強い」、(Ma)にmasila-「強くする」がある。

(Ma)ətəŋiなどについては、(172)「できる」の項を参照。

(Ma)akdun等と同源の語はC.によれば(Ek)、(N)、(Oc)、(U)、(Ut)、(Na)では「熊の冬眠用の洞穴」であり、(S)、(Ul)では「家、住居」、(Ma)akdukan/akdunは「(場所について)丈夫な、強い」となっている。

(178)[438]よわい(弱い)		(Hz)---		(J)ñitaba
(Ew)ərdəskə	(Ek1)zəkəj	(U)gəəsə/əədə	(Na)sətui	(Si)husun aqu
/ač əŋilə				ñiirə
(S)təŋkəj aaŝin(Ek2)---		(Oc)ədəə	(Ut)ugdəə	(Ma)ñijərə

(Ew)ač əŋilə、(S)təŋkəj aačinはそれぞれ「ない 力について」、「力-自分の ない」のような構成になっている。(177)「強い」の項を参照。C.によれば(Ew)ərdəskə「弱い、力がない」と同源の語は他の言語になく、(Ew)ərgɯd-「弱る」からの派生語であるとしている。

(Ek1)zəkəjはC.には(Ek)ǰokəj「悪い」としてあがっていて、これと同源の語として(Ek)、(S)、(Ew)、(N)、(Ut)、(Na)に「合う、適当な」などの意の語があがっている。

(U)gəəsəはC.には(U)gə(h)ə「悪い、弱い」として(U)のみであがっており、他の言語に対応する語はないようだ。

(U)əədə、(Oc)ədəəと同源の語はC.によれば(Oc)ədə「バカな、弱い」、(U)əədə「バカ」、(Ul)ədən「バカな、バカ」、(Na)əədən「バカ」、(Ma)ədən「不完全な、欠けている、不具な」である。

(Na)sətuiはC.によれば他の言語に対応する語がない。

(Ut)ugdəəと同源の語はC.によれば(Ek)ugǰə「(サケについて)やせこけた」、(N)ugdəxə「少ない、小さい、力が弱い」、(Ut)ugdə「静かな、穏やかな、弱い、力がない」、(Na)クル・ウルミ方言ugǰə-「姿を消す(魚が深い湖に)」である。

(Ma)ñijərəはC.によれば同源の語は他の言語になく、(Ma)ñərə「弱い、細い、薄着の」と記載されている。

(J)ñitabaと同源の語はC.によれば(Ma)ñitan「弱い、(酒など)薄い、色がぼんやりした、(ナイフなど)切れない」があがっている。

(179)[455]ながい(長い)		(Hz)---		(J)golmigi
(Ew)gonɯm	(Ek1)noñimi	(U)wañimi	(Na)wañimi	(Si)Goləmin
(S)nonom	(Ek2)goñim	(Oc)goñimi	(Ut)goñimi	(Ma)golmin

maŋga「つらい、値が高い、わるい、強い、とても」、(Ul)maŋga「つらい、しんどい、はげしい、強い」、(Ut)maŋga「硬い、強い、とても、闘士、富者」、maŋgauli「硬い」、(Na)maŋga「つらい、しんどい、強い、とても」、(Ma)maŋga「硬い、つらい、強い」、(J)maŋga「つらい、難しい」である。

(Na)、(Ut)にみられるmasiと同源の語はC.によれば(N)、(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にmasiの語形であり、意味は「丈夫な、強い」であり、また(Ek)にmanñii「丈夫な、強い」、(Ma)にmasila-「強くする」がある。

(Ma)ətəŋiなどについては、(172)「できる」の項を参照。

(Ma)akdun等と同源の語はC.によれば(Ek)、(N)、(Oc)、(U)、(Ut)、(Na)では「熊の冬眠用の洞穴」であり、(S)、(Ul)では「家、住居」、(Ma)akdukan/akdunは「(場所について)丈夫な、強い」となっている。

(178)[438]よわい(弱い)		(Hz)---		(J)ñitaba
(Ew)ərdəskə	(Ekl)zəkəj	(U)gəəsə/əədə	(Na)sətui	(Si)husun aqu ñiirə
/aǰ əŋilə				
(S)təŋkəj aašin(Ek2)---		(Oc)ədəə	(Ut)ugdəə	(Ma)ñijərə

(Ew)aǰ əŋilə、(S)təŋkəj aačinはそれぞれ「ない 力について」、「力-自分の ない」のような構成になっている。(177)「強い」の項を参照。C.によれば(Ew)ərdəskə「弱い、力がない」と同源の語は他の言語になく、(Ew)ərgwd-「弱る」からの派生語であるとしている。

(Ekl)zəkəjはC.には(Ek)ǰokəj「悪い」としてあがっていて、これと同源の語として(Ek)、(S)、(Ew)、(N)、(Ut)、(Na)に「合う、適当な」などの意の語があがっている。

(U)gəəsəはC.には(U)gə(h)ə「悪い、弱い」として(U)のみであがっており、他の言語に対応する語はないようだ。

(U)əədə、(Oc)ədəəと同源の語はC.によれば(Oc)ədə「バカな、弱い」、(U)əədə「バカ」、(Ul)ədən「バカな、バカ」、(Na)əədən「バカ」、(Ma)ədən「不完全な、欠けている、不具な」である。

(Na)sətuiはC.によれば他の言語に対応する語がない。

(Ut)ugdəəと同源の語はC.によれば(Ek)ugǰə「(サケについて)やせこけた」、(N)ugdəxə「少ない、小さい、力が弱い」、(Ut)ugdə「静かな、穏やかな、弱い、力がない」、(Na)クル・ウルミ方言ugǰə-「姿を消す(魚が深い湖に)」である。

(Ma)ñijərəはC.によれば同源の語は他の言語になく、(Ma)ñərə「弱い、細い、薄着の」と記載されている。

(J)ñitabaと同源の語はC.によれば(Ma)ñitan「弱い、(酒など)薄い、色がぼんやりした、(ナイフなど)切れない」があがっている。

(179)[455]ながい(長い)		(Hz)---		(J)golmigi
(Ew)ŋonum	(Ekl)noñimi	(U)wañimi	(Na)wañimi	(Si)Goləmin
(S)nonom	(Ek2)ŋoñim	(Oc)ŋoñimi	(Ut)ŋoñimi	(Ma)golmin

maŋga「つらい、値が高い、わるい、強い、とても」、(Ul)maŋga「つらい、しんどい、はげしい、強い」、(Ut)maŋga「硬い、強い、とても、闘士、富者」、maŋgauli「硬い」、(Na)maŋga「つらい、しんどい、強い、とても」、(Ma)maŋga「硬い、つらい、強い」、(J)maŋga「つらい、難しい」である。

(Na)、(Ut)にみられるmasiと同源の語はC.によれば(N)、(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にmasiの語形であり、意味は「丈夫な、強い」であり、また(Ek)にmanñii「丈夫な、強い」、(Ma)にmasila-「強くする」がある。

(Ma)ətəŋiなどについては、(172)「できる」の項を参照。

(Ma)akdun等と同源の語はC.によれば(Ek)、(N)、(Oc)、(U)、(Ut)、(Na)では「熊の冬眠用の洞穴」であり、(S)、(Ul)では「家、住居」、(Ma)akdukan/akdunは「(場所について)丈夫な、強い」となっている。

(178)[438]よわい(弱い)		(Hz)---		(J)ñitaba
(Ew)ərdəskə	(Ek1)zəkəj	(U)gəəsə/əədə	(Na)sətui	(Si)husun aqu
/ač əŋilə				ñiirə
(S)təŋkəj aašin(Ek2)---		(Oc)ədəə	(Ut)ugdəə	(Ma)ñijərə

(Ew)ač əŋilə、(S)təŋkəj aačinはそれぞれ「ない 力について」、「力-自分の ない」のような構成になっている。(177)「強い」の項を参照。C.によれば(Ew)ərdəskə「弱い、力がない」と同源の語は他の言語になく、(Ew)ərgwd-「弱る」からの派生語であるとしている。

(Ek1)zəkəjはC.には(Ek)ǰokəj「悪い」としてあがっていて、これと同源の語として(Ek)、(S)、(Ew)、(N)、(Ut)、(Na)に「合う、適当な」などの意の語があがっている。

(U)gəəsəはC.には(U)gə(h)ə「悪い、弱い」として(U)のみであがっており、他の言語に対応する語はないようだ。

(U)əədə、(Oc)ədəəと同源の語はC.によれば(Oc)ədə「バカな、弱い」、(U)əədə「バカ」、(Ul)ədən「バカな、バカ」、(Na)əədən「バカ」、(Ma)ədən「不完全な、欠けている、不具な」である。

(Na)sətuiはC.によれば他の言語に対応する語がない。

(Ut)ugdəəと同源の語はC.によれば(Ek)ugǰə「(サケについて)やせこけた」、(N)ugdəxə「少ない、小さい、力が弱い」、(Ut)ugdə「静かな、穏やかな、弱い、力がない」、(Na)クル・ウルミ方言ugǰə-「姿を消す(魚が深い湖に)」である。

(Ma)ñijərəはC.によれば同源の語は他の言語になく、(Ma)ñərə「弱い、細い、薄着の」と記載されている。

(J)ñitabaと同源の語はC.によれば(Ma)ñitan「弱い、(酒など)薄い、色がぼんやりした、(ナイフなど)切れない」があがっている。

(179)[455]ながい(長い)		(Hz)---		(J)golmigi
(Ew)ŋonɯm	(Ek1)noñimi	(U)wañimi	(Na)wañimi	(Si)Goləmin
(S)nonom	(Ek2)ŋoñim	(Oc)ŋoñimi	(Ut)ŋoñimi	(Ma)golmin

(180)[456]みじかい（短い）		(Hz)foxolon		(J)foxolo
(Ew)urumkun	(Ek1)urumkun	(U)umasa(')a	(Na)xurmi	(Si)mohətə/fioxələn
(S)urugkun	(Ek2)urumkun	(Oc)uumi	(Ut)xurumi	(Ma)(mokto)/foxolon

(Hz)及びⅣ群にみられる諸形と同源の語はC.によれば(Ek)xokpočo「動物の尻（？）」、(Ma)foxolon「短い」、(J)foxolo「短い」となっている。

(Si)mohətəは山本（1969）によれば用例をみる限り尻尾や髪の毛などについて、「短い、長さが足りない」ことをいうようだが、(Ma)moktoは羽田（1937）によれば「屈強な、凶暴な、先端を切り落として丸みを持たせた、尖りをなくした」となっていて、「短い」の意の明記はない。C.によればこれらと同源の語は(Ek)、(S)、(Ew)、(Oc)、(Na)、(Ma)にあって、「切れない、壊れた、短い」などの意味である。

その他の諸形は互いに対応するものと考えられるが、C.をみるとⅣ群以外の全言語に「短い」の意味であることが確認される。

(181)[457]とおい（遠い）		(Hz)goro		(J)goroo
(Ew)təgələ	(Ek1)goro	(U)goo	(Na)goro	(Si)Gorə
(S)goro	(Ek2)goro	(Oc)goo/goolo	(Ut)goro	(Ma)goro

(Ew)təgələは-ləが処格接辞であるので、C.にはtəgəとしてあがっているが、(Ew)のみで、他の言語に対応する語形はないようだ。C.はヤクート語のtägäl/tägil「遠くから」を比較している。

他の諸形は対応すると考えられるが、C.でもやはり「遠い」の意で全ツングースにあがっており、(Ew)にもgor「遠い」がある。

(182)[458]ちかい（近い）		(Hz)kalči		(J)digasa
(Ew)---	(Ek1)daga	(U)daasa	(Na)jija	(Si)hanči
(S)daga	(Ek2)daga	(Oc)laki	(Ut)laxa	(Ma)xanči

(Hz)kalčiと同源の語はC.によれば(Ul)kaal-「近寄る」、kaalči「近い」、(Ut)kal-「こっそり忍び寄る」、(Na)kaal-「近づく」、kal/kalči「近い」、(Ma)karča-「衝突する、双方から突き当たる」である。ⅢⅣ群に特徴的な語とみてもよいだろう。

(Oc)laki、(Ut)laxaと同源の語をC.についてみてみると、やはり(Oc)及び(Ut)の語形が「近い」の意であがっているだけである。他方別の項目でlaŋ「近い、すぐ隣に」が同形・同意味で(Oc)、(U)、(Ul)、(Ut)、(Na)にある。これら両者が同源である可能性もあるだろう。

(Na)jijaと同源の語はC.によれば他に(Ul)jija「近い」があるのみである。

(Si)hanči、(Ma)xančiと同源の語はC.によれば（Ek)kaŋi（＜(Mo)）「仲間」、(Ew)kaaŋi「（子牛の）双子」、(Ma)kaŋi「同類、仲間」、xanči「（関係が）近い、近い」であり、さらに(lit.Mo)xani「仲間」、xaniča-/xaniči-「親しい関係にある」を比較している。

(S)dagaをはじめとする諸形と同源の語はC.によれば(Ek)daga、(S)daga、(Ew)daali、(N)daga、(U)daas(')a、(J)digasa（意味は皆「近い」）で、C.はさらに(Na)dagamagda「（近い距離で用いる）狩猟刀」、(Na)ビキン方言dapti「ちょっとの間、短い時間」、

(Ma)dartaj「少しの間、すぐに」を同源の語としてあげている。

(183)[461]あつい（熱い）		(Hz)očkoli		(J)xalgun
(Ew)xəksi	(Ek1)xəkuu	(U)xəkui	(Na)pəku/pəkusi	(Si)haləhun
(S)əxuddi	(Ek2)xəkuxi	(Oc)xakasi	(Ut)xəkkuuli	(Ma)xalxūn

Ⅳ群の三言語にみられる諸形についてC.はモンゴル語（(lit.Mo)xaluun「暑さ、猛暑」）から入ったものと考えている。

他の言語の諸形は互いに対応するものと考えられるが、C.によれば(Ma)，(J)以外の全言語で「暑い、熱い」の両方の意味を明記してあがっている。(Ma)にはfijakijan「猛暑、熱さ」があがっている。

(184)[462]さむい（寒い）		(Hz)adakoli		(J)šingun/bəi
(Ew)iŋəň/gialsi	(Ek1)iŋiňi	(U)gilii	(Na)gičisi	(Si)šahurun/saburun
(S)iňigiddi	(Ek2)iŋiňixi	(Oc)iŋəňisi	(Ut)nuŋǰuuli	(Ma)šaxūrun/bəikuwən

(Ew)gialsi，(U)gilii，(Na)gičisiと同源の語はC.によれば、(S)，(Ma)，(J)以外の全ツングースにあり、「冷たい」である（C.の(Ul)，(Na)では単にkholodnyjとあって特に「液体について」などの明記がないが、少なくとも(Na)については「冷たい」として使われる）。したがって媒介言語であるロシア語のkholodnyjが「寒い、冷たい」の両方の意を持つために、誤って採ったものである。

(Hz)adakoliと同源の語はC.にみえるところの(Oc)adakasi「悪い、不快な、汚い」、(Ul)ada buda očiňi「全面にわたって汚くなる」、及び(Na)，(Ma)にみられる感嘆詞のadadaであろうか。

(Ew)iŋəňをはじめ上記の(S)，(Ek1 2)，(Oc)にみられる諸形と同源の語について、まず(U)でも他のインフォーマントからiŋəňiを採ることができた。C.によればやはりⅠⅡ群の諸言語に上記のような語形で「寒い」があり、Ⅲ群の言語にも「凍える」（(Ul)siŋgun-，(Ut)siŋguun-，(Na)siiŋgu-）、(Ma)にはsiŋgija/siŋgəjən/siŋkəjən「寒い」があがっている。

(Ut)nuŋǰuuliと同源の語はC.によれば(Ek)ňəŋdələə「（寒い日の空について）明るい、澄んだ、雲のない」、(Ul)nuŋduli/ŋuŋduli「寒い」、(Ut)nuŋduuli/nuŋǰuuli「寒い」、noŋǰi「寒い」である。Ⅲ群に特徴的な語とみることができよう。

(Ma)šaxūrunはC.によれば他の言語に同源の語がない。

(J)šingun/bəiの意味について、Kiyose (1977) にはšingun「冷cold」、bəi「寒chilly」とある。šiŋgunについてはC.は他の言語における同源の語をあげていないが、先にみたⅢ群の「凍える」などと対応するものではないだろうか。bəiと同源の語はC.によれば (Ek) bəgii-，(Ew)bəi-/bəji-，(N)bəjii-，(Ul)bəi-/bəji-，(Na)bəi-/bəji-で意味は皆「凍える、凍傷になる」である。

(185)[467]あたらしい（新しい）		(Hz)irkin		(J)iǰəgi
(Ew)anŋamti	(Ek1)irkəkkin	(U)iməxi	(Na)sikun	(Si)iǰee
(S)ikkin	(Ek2)oomokta	(Oc)ikkəi	(Ut)sitəi	(Ma)iǰə

(Ew)angamtiについてC.は全ツングースで「年」を示す語（(59)「年」の項参照）と同源であるとしている。C.によれば他に(Ek)のみにangaamakta「（獣の足跡が）新しい」、angamta「新しい」がある。

(Ek2)oomoktaはC.にもなく、不明。

(U)iməxiと同源の語はC.によれば(Ek)iməkin「新鮮な、新しい」、(N)iməxin「（食べ物について）新鮮な」、(U)iməxi「新しい」、(Oc)iməw/iməu「新鮮な」、(Na)ビキン方言imkin, (Na)クル・ウルミ方言imkin「新鮮な、新しい」である。基本的にⅠⅡ群に分布する語とみることができる。

他の(S), (Ek1), (Oc), (Na), (Ut), (J), (Si), (Ma)の諸形は互いに対応するものと考えられる。C.では(Ew)を除く全ツングースにあり、(U)以外は「新しい」の意である。(U)にはsikə「若い」があがっているが、これは対応に合わないので検討を要する。

(186)[468]ふるい（古い）		(Hz)manə-		(J)fuwəi
(Ew)irbət	(Ek1)agiptii	(U)daampii/anapti	(Na)goropči	(Si)fəə
(S)irəət	(Ek2)goropti	(Oc)goopti	(Ut)goropči	(Ma)fə

(Ew), (S)にみられる語と同源の語はC.によればやはり(S)irəəktə「古い、昔からの」、(Ew)irbəətと(N)ij（<*ir）「ついさっき、今しがた」である。

(Ek1)agiptiiと同源の語はC.によれば(Ek)agipti, (S)agiktii/ajirtii, (N)agipti/ajipti（意味は皆「古い、以前の」）、(Oc)ainan, (U)anana, (Ma)ajfiñi（意味は皆「昔、かつては、昔から」である。

(Ek2), (Oc), (Na), (Ut)にみられる諸形は(181)「遠い」でみた諸形と同源であると考えられる。C.によれば(Ek)goroptii, (Oc)goopti, (U1)goropti, (Ut)goropči, (Na)goropči（意味は皆「（特に物について）古い」）である。

(Hz)manə-の安（1986）の漢語の訳は「旧」である。(Na)mana-「捕り尽くす、使い尽くす、尽くす」をはじめ全ツングースにある語形と同源のものだろう。

(U)daampiiはC.によれば(U)のみにあり、daampi(h)i「老朽化した、古い」としてあがっている。

(Ma)fəと同源の語はC.によれば(Ma)の他には唯一(Na)pər pər gudəənəsi「老朽化した」があがっているだけである。

(187)[471]おおい（多い）		(Hz)malxun		(J)ambala
(Ew)xooja	(Ek1)xəgdii	(U)əgdi	(Na)əgǰi	(Si)lavədu/lavədə
(S)baraan	(Ek2)kətə	(Oc)əgdi	(Ut)bara	(Ma)labdu

(Ew)xoojaについて、C.は(177)「強い」でみた(Ew)xoo「強い、大きい、すごい、力、多いこと、豊富さ」（(Ek)soo, (N)soo）と同源とみている。

(S)baraan, (Ut)baraと同源の語はC.によれば(Ek)baran, (S)baraa, (N)baja, (Ut)bara（以上意味は皆「多い」）と(Ew)baran「（食器について）容量の大きい、深い」、(Ma)baran「多量、山、群衆」である。(Ut)には(Ek)から入ったものではないだろうか。

(Ek1), (U), (Oc), (Na)にみられる諸形については(175)「大きい」の項参照。

(Ek2)kətəと同源の語はC.によれば(Ek), (Oc), (U), (U1), (Ut), (Na)にあり、(Ek)は

「多い」の意だが、それ以外の言語では主に副詞的に「あまり～だ、～すぎる、あやうく、すんでのところで～するところだった」のような意味で用いられる（ただし(Oc)では別にkətu/kətu əgdiがあって、これは「多い」の意である）。

(Hz)malxunと同源の語はC.によれば(N)，(U)，(Ul)，(Na)（ただしクル・ウルミ方言とピキン方言），(Ma)にあって、アムール下流域型の分布を示している。意味は皆「多い」だが、(U)malukči-は「自分の身長に達する、大人になる」の意である。(N)にはおそらくⅢ群の言語から入ったものであろう。またナーナイ文語の基礎となったナイヒン方言ではこの語が使われず、(Hz)及び(Na)クル・ウルミ方言及びピキン方言で使われ、この三言語がアムール中流域言語圏をなしていることは風間（1996a）で触れた。

(Ma)labduと同源の語はC.によれば他に(Na)のみにあり、(Na)labdo「多い、深い」である。そこではさらに(lit.Mo)lab「深く、しっかり、確かに」を比較している。

(188)[472]すくない（少ない）	(Hz)komčə		(J)əkəxun
(Ew)abul (Ek1)askun	(U)wača(')a	(Na)oi	(Si)koməsə
(S)xondo (Ek2)uwukun	(Oc)ujaka	(Ut)oi/ojuuka	(Ma)komso

(Ew)abulと同源の語はC.によれば（J)を除く全ツングースにあり、(Ma)を除きabul-/abuli-などの形で「不足する、足りない」の意である（(Ma)absa-/absi-は「痩せる、痩せてひからびる」の意）。

(S)xondoについてC.をみると(S)のみにある(S)xondokxon「少しの、わずかの」がある。モンゴル語からの借用を検討してみたが、対応するような語は見当たらない。

(Ek1)askunと同源の語はC.によれば(Ek)asun，(Ut)xasu「いくら、いくつ」などで、指小辞がついてできたものと考えられるが、同じⅠ群の(S)，(N)にやはり同じく「少し」の意の派生語がある。

(Ek2)uwukun，(Oc)ujaka，(Na)oi，(Ut)oi/ojuukaをC.は同源のものとみなし、同じ項目に(Ek)（ugiikuun），(N)，(Oc)，(Ul)，(Ut)，(Na)の語形をあげている（意味は皆「少ない」である）。

(U)wača(')aについては(176)「小さい」の項を参照。

(Hz)，(Ma)などにみられる語形についてC.は、(Ek)，(Na)，(Ma)に同源の語をあげているが、(Ek)，(Ma)には直接、(Na)には(Ma)を経由して(lit.Mo)xomsa「少ない、乏しい」が入ったものとしている。

(189)[476]ひかり（光）	(Hz)gəŋgin		(J)fəčin
(Ew)ŋəəri (Ek1)nəərin	(U)ǰigda-	(Na)ŋəəgǰən/ixərə	(Si)eləsən
(S)ilaan (Ek2)garpa	(Oc)ŋəəgǰə	(Ut)suunə	(Ma)əldən

(Ew)ŋəəri，(Ek1)nəərin，(Oc)ŋəəgǰə，(Na)ŋəəgǰənと同源の語はC.によれば全ツングースにあるが、上にもみるようにⅠ群は-rii/-rinのような語尾を取り、ⅡⅢ群は-gǰə/-gǰənのような語尾を取るようだ。これらの言語では意味は名詞「光」でありまた形容詞「輝く、明るい」である（ただし(S)だけは「朝焼け」の意に転化している）。他方(Ma)ではgəxun「光、明るい、清潔な」であり、他方gəriもあるが意味は「ひらめき、明滅」となっている。

(S)ilaanと同源の語はC.によれば、ⅠⅡ群でila-、Ⅲ群でiwan-、(Ma)ではjila-の形で、「火をつける、燃え立たせる」の意味であり、(S)の他には(Ek)にだけilan/ilačin「(火の)光、点火、発火」があがっている。

(Ek2)garpaと同源の語はC.によれば、(Ek)、(Ew)、(N)、(Ut)に「光、光線」の意の名詞がある。さらに(J)を除く全ツングースに、同形、もしくは若干音変化した語形で「輝く、矢を射る」などの意味を持った動詞がある。

(Hz)gəŋginと同源の語と思われる語はC.にあるが、(Ul)gəgǰən、(Ut)gəgdən、(Na)gəŋgiənは「清潔な、透明な」の意であり、他方(Ma)gəŋgijənは「清潔な、明るい、賢い」となっている。最初にみた(Ew)ŋəəriなどと同源である可能性がある。

(U)ǰigda-はC.にもなく、不明。

(Na)ixərə「灯明皿、ランプ、明かり」は、C.によればほとんど同形同意味で(N)、(Oc)、(Ul)、(Ut)、(Na)に分布しているので、アムール下流域型の分布を示す語としてよいだろう。ただし(Ma)にはないようだ。

(Ut)suunəと同源の語はC.によれば、(Ut)suun「太陽」((57)「日」の項参照)をはじめとする語で、C.には(Ut)suunə-「(太陽が)光る、輝く」の意の動詞としてあがっており、同様の動詞が(S)、(Ma)、(J)を除く全ツングースにあがっている。

(Ma)əldənと同源の語はC.によれば他になく、(Ma)にのみəldə-「光る、輝く」という動詞とともにあがっている。(J)fəčinもC.によれば他の言語に同源の語がない。

(190)[477]しろい(白い)		(Hz)šaŋgin		(J)šangijan
(Ew)ŋoobati	(Ek1)bagdarin	(U)čaligi	(Na)čaagǰan	(Si)šiaŋan
(S)giltarin	(Ek2)bagdarin	(Oc)čəəkkə	(Ut)taagda	(Ma)šaŋijan

C.によれば(Ew)ŋoobatiと同源の語は他の言語になく、(Ew)のみで、「白くなる」という意の動詞の語形とともにあがっている。

(S)giltarinと同源の語はC.によれば(Ek)、(S)、(Ew)のみにあり、「白い」だが、(Ek)では特に「(トナカイの毛並みについて)白い」としている。

(Ek1 2)bagdarinと同源の語はC.によれば(Ek)、(S)、(N)、(Ma)にあり、(Ma)baldaは「獣の体毛の白い斑、斑点」だが、他は「白い」である。

(Oc)čəəkkəはAvrorin i Revadeva (1978) にもあるのにC.に記載がない(Avrorin i Levedeva (1978) では(Oc)čəəkkə(n)となっており、語末にはnがあるようだ)。上記の(U)や(Na)の語形と同源だろうか。(Oc)ではさらに他のインフォーマントから(Oc)čaagǰaが得られ、これはAvrorin i Levedeva (1978) にもあるが、Ⅲ群から入ったものではないか。

他の(Hz)、(U)、(Na)、(Ut)、(J)、(Si)、(Ma)は対応するものと考えられる。C.によればこれらと対応する語は全ツングースにあるが、Ⅰ群の四言語に共通するčaalban/čalbanは「白樺」で、(S)čiga/čigan「白い」以外にはⅠ群に「白い」の意では同源の語があがっていない。他方ⅡⅢⅣ群には(Oc)čaaba/čaabban「白樺」以外には「白樺」の意の語があがっていない。(189)「光」と同様、Ⅲ群の語が-gǰan/-gǰənという語尾を持っていることが注目される。また(U)では以下にみる「黒い」、「赤い」にも共通して-ligiの語尾を持っている。C.はさらに(lit.Mo)čaγan「白い」、čaγaγčin「(獣の斑点など)白い」などを比較している。

(191)[478]くろい（黒い）		(Hz)sakalki		(J)saxalijan
(Ew)xakɯrin	(Ek1)koŋnorin	(U)paaligi	(Na)---	(Si)jačin/qarə /sahelin/sahelian/sahaahun
(S)xaraa	(Ek2)koŋnorin	(Oc)sakai	(Ut)saari	(Ma)jačin/kara /saxalijan/saxaxɒn

このインフォーマントからは得られなかったが、(Na)でもsaxarin「黒い」という語がきわめて一般的に用いられる。

その(Na)と、(Ew)、(Hz)、(Oc)、(Ut)、(Si)；(Ma)、(J)にみられる諸形と同源の語はC.によれば、(S)、(N)、(U)を除く全ツングースにあり、「黒い」の意で、(Ul)、(Ut)以外には「暗い」の意もあがっている。

(Ek1 2)koŋnorinと同源の語はC.によればⅠ群の四言語だけに分布している。(180)「白い」でみたbagdarinとセットになってⅠ群にある語と考えてよいだろう。

(U)paaligiはShnejder (1936) によればpa(')aligiで、C.は(Ek)xaktiraa「暗い」、(Na)pakči「暗い」、(Na)paka paka bi-「黒々とした」などと同源の語と考えており、同源の語は全ツングースにある。ただ(U)に p-ではじまる語があるのは音対応の点からみておかしい。Shnejder (1936) にはp-ではじまる語は81語しかあがっておらず、うちロシア語からの借用語が14語、漢語からの借用語が１語、擬声語とみなせるものが10語あり、残りは56語ということになる。その中にも(Na)からの借用語が多く含まれていることが予想される。

山本 (1969) によれば(Si)jačinは「黒い」、qarəは「（馬の毛色が）黒い、青毛の」、sahelin/sahelianは「暗色の」、sahaahunは「真っ黒な」である。羽田 (1937) によれば(Ma)jačinは「青い、青黒い」、karaは「黒馬、黒犬」、saxalijanは「黒色の、黒の」、saxaxɒnは「うす黒の、淡黒色」となっている。

(Si)qarə、(Ma)karaと同源の語はC.によればⅠ群の四言語と(Ut)、(Na)、(Ma)にあるが、(lit.Mo)xara「黒い、暗い」からの借用である。

(Si)jačin、(Ma)jačinについてC.は、全ツングースにある(Ek)eella「炭」などと同じ項目のもとで扱っているが、漢語の「元青yuan²qing¹」から入った可能性も疑っている。

(192)[479]あかい（赤い）		(Hz)fulgian		(J)fulagijan
(Ew)xulaŋa	(Ek1)ularin	(U)xulaligi	(Na)səəgǰən	(Si)fulaahun
(S)ularin	(Ek2)xularin	(Oc)səəgǰə	(Ut)səəgdə	(Ma)fulaxɒn

(Ew)、(S)、(Ek1 2)、(Hz)、(U)、(J)、(Si)、(Ma)と同源の語はC.によれば「赤い」の意で(Ul)、(Ut)を除く全ツングースにあるとしている。しかし (Na)にはビキン方言のfolgɛɛ/forgɛɛがあるだけで、これは形からみて(Ma)からの借用と考えられるから、事実上Ⅲ群にはないことになる。

他方これとは基本的に相補的に分布するのが上記の(Na)səəgǰən、(Ut)səəgdəと同源の語である。C.によればこれらと同源の語は(Ek)、(Oc)、(Ul)、(Ut)、(Na)にあるが、(Ek)はゼーヤ方言にのみsəgǰən「血のように赤い」がある。(Oc)はこれまでみてきたようにⅢ群からの影響を強く受けた可能性があり、これもⅢ群からの借用であるかもしれない。

(193)[483]いろ（色）		(Hz)---		(J)boč̌ogai
(Ew)baad	(Ek1)uŋguu	(U)səə/ila(')a	(Na)boiko	(Si)boč̌ə/boč̌u
(S)buduur	(Ek2)kiraska	(Oc)xač̌ii-ñi	(Ut)bəxə	(Ma)boč̌o

(Ew)baadと同源の語はC.によれば(Ek)と(Ew)にしかなく、(Ek)の諸方言にみられるbaadəの意味は「顔」である。(Ew)では「様子、表情、構造、形状、色、外形」といろいろな意味があがっており、さらに(lit.Mo)bajdal「様子、外見、状態、生活環境」が比較されている。

(S)buduurにあたると考えられる語としてC.には(S)buduun「染料、塗料」があがっており、これと同源の語は(Ek), (S), (U), (Ul), (Na), (Ma)にあるとしている。またそこではさらに(lit.Mo)buda「染料、色」が比較されている。

(Ek1)uŋguuは(lit.Mo)öngge「色、色彩、表面、外見、様子、調子」（小沢 1983による）からの借用、(Ek2)kiraskaはロシア語からの借用である。

(U)səəはおそらく漢語の「色se^4」であろう。

(U)ila(')aは不明。(39)「花」でみた語と同じか。

(Oc)xač̌ii-ñiと同源の語は(30)「物」の項でみた「種類、さまざまな」の意味でアムール下流域型の分布を示す語であるが、「色」の意味は記されていないようだ。

(Na)とⅣ群にみられる諸形は対応すると考えられる。C.によればこれらと同源の語は(EW), (Oc), (U), (Ut), (Na), (Ma), (J)にあり、(Ew), (J)以外の言語は*borkoという祖形に遡れる形をしている。(Ew)の意味は「顔の美しさ、かわいさ」で、他の言語は「色」だが、(Oc), (Na), (Ma)には「染料」の意も、(Ut)には「様子、形」、(Ma)には「様子、顔の美しさ」の意味もある。また池上（1997）では(Ut)boč̌o「顔立ち」としている。

(Ut)bəxəと同源の語はC.によれば(S), (N), (U), (Ul), (Ut), (Ma), (J)にありアムール下流域型の分布を示していて、意味は皆「墨」である。(Ut)には「染料」の意もあがっている。C.によれば(lit.Mo)beke「インク」があるが、最終的な起源は漢語の「墨mo^4」であろう。

(194)[485]いい（良い）		(Hz)aji		(J)nonmuxo/sain
(Ew)aj	(Ek1)aja	(U)aja	(Na)uləən	(Si)hoǰə/šian/sian
(S)aj	(Ek2)aja	(Oc)aja	(Ut)aja/uliŋga	(Ma)xoǰo/sain

(Na)uləən, (Ut)uliŋgaと同源の語はC.によれば(U)uligdig(')a「（物、生き物について）美しい」、(Ul)uləən「良い」、(Ut)uliŋga「良い、美しい、易しい、自由な、優しい」、(Na)uləən「良い、美しい」である。

(J)nonmuxoと同源の語はC.によれば(U)を除く全ツングースにあって、「ゆっくりした、もたもたした、ぎこちない、おとなしい、静かな、優しい、おだやかな」などの意味である。(lit.Mo)nomuqan「温和な、穏やかな」から入ったものと考えられる。

(Si)hoǰə, (Ma)xoǰoと同源の語はC.によれば(Ma)の他に(J)xoǰo「美しい」があがっている。(Ma)xoǰoの意味は「美しい、模範的な、完全な」としている。

(Si)šian/sian, (Ma)sainはモンゴル語からである。

他の諸形は互いに対応し、C.でも全ツングースにあがっている。ただしⅠⅡⅢ群ではaja

/ajの語形で「良い」だが、Ⅳ群では(Ma)ajnči「たぶん、おそらく」、(J)aixuburu「救う、解放する」などしかあがっていない。またⅢ群、少なくとも(Na)では「(積極的な意味での)良い」ではなく、「まあいい、大丈夫だ、健康だ」のような意味で用いられており、意味が若干下落している。

(195)[486]わるい(悪い)	(Hz)əxələ		(J)əxə
(Ew)keeňəli (Ek1)əruu	(U)gəə	(Na)čukin	(Si)ǰukun/exə/exəliŋə
(S)əruu (Ek2)əruu	(Oc)atakasi	(Ut)orki	(Ma)əxə/əxəliŋə

(Ew)keeňəliと同源の語はC.によれば(Ew)の他には(Ek)kəňəčəən「火から落ちる炭」があるだけだが、はたして本当にこれが同源の語なのかどうか疑わしい。(Ew)ではkəəňeli/kəəňegiとしてあがっていて、意味は広く「悪い、忌まわしい、有害な、意地悪な」となっている。

(S), (Ek1 2)にみられる諸形と同源の語はC.によれば(Ek), (S), (U1), (Na), (Ma)にあり、(Ek), (S)は単に「悪い」、(Na), (Ma)は「苦しみ」、(U1), (Ma)には「苦しめる」という意味で動詞形があがっている。

(U)gəəはShnejder (1936) ではgə(h)əであるから、祖形はgəsəということになる。C.によればこれと同源の語は他の言語になく、(U)gə(h)a「悪い、忌まわしい、弱い」があがっているのみである。

(Oc)atakasiはC.には(Oc)adakasiとしてあがっている。この語については(184)「寒い」の項で触れた。

(Oc)では他のインフォーマントからさらに(Oc)okki, (Oc)čukiという語が得られたが、これはそれぞれ上記の(Na), (Ut)の語形と対応する。まず(Oc)okkiと同源の語はC.によれば(Oc), (U1), (Ut), (Na)にしかなく、意味は皆「悪い」である。したがってこの語はⅢ群の言語から(Oc)に入ったものと考えることができる。次に(Oc)čukiと同源の語はC.によれば(Oc)と(U1)にしかあがっていない。Onenko (1980) にあり、(Na)で使われることは間違いないが、より下流の方言でより多く使われる語であるかもしれない。この語もやはりⅢ群の言語から(Oc)に入ったものではないだろうか。

(J)əxə, (Si)exə/exəliŋə, (Ma)əxə/əxəliŋəと同源の語はC.によれば(Na)と(Ma)と(J)にしかなく、(Na)には(Ma)から入ったものと考えたい。

(Si)ǰukunと同源の語はC.によれば(Oc), (U), (U1), (Na), (Ma)にあり、(Ma)以外は「やっとのことで、なんとか(・・・する)」という意味である。(Ma)ǰukənは「並みの、平凡な、なんとか足りる」の意であり、(Si)でさらに意味の下落が起きたものと考えられる。

(196)[488]おなじ(同じ)	(Hz)---		(J)əmuǰi
(Ew)tarakat (Ek1)adali	(U)bəjəku/omoti(Na)---		(Si)eməaliŋə /emə durun
(S)adal (Ek2)uraldi	(Oc)omonti	(Ut)emətte	(Ma)əmu adali

(Ew)tarakatは指示代名詞より派生した語で「そのような」の意味であろう。

(S)adal, (Ek1)adaliと同源の語はC.によれば(Ew)と(J)を除く全ツングースにあるが、

「同じ」の意の明記があるのは(Ek)と(Ma)だけで、(S)は「似ている」の意となっている。その他の言語の意味はさまざまで、ここには違う語源のものがいくつか混ざっている可能性がある。一方おそらく「同じ」という意味から派生した語と思われる「双子」という語は(N)adaxu/adaku, (Oc)adawu/adau, (U)ad(')u, (Ul)adau/adu, (Ut)adaaw/adau, (Na)adooという諸形で分布している。アムール下流域型の分布ともいえるが、(Ma)にはないようだ。またC.はこの項目で(lit.Mo)adali「同じ、似ている」を比較している。

なお名詞編(83)「夫」の項で、(Oc)ada「夫、妻」の語がC.に見いだせないと書いたが、この(S)adalなどと同源の項目にあがっていた。この場を借りて訂正させていただく。

(Ek2)uraldiと同源の語はC.によれば(Ek), (Ew), (Ut)にあり、(Ek)uraə-「似ている」、uraaldii/uraaldiičəə/uraallii/uraarii「似た、似ている」、(Ew)uraəč「似ている、同じ」、(Ut)uraxə「似ている」である。(Ut)の語は(Ek)から借用した可能性もあるだろう。池上 (1997) にはこの語はあがっていない。

(U)bəjəkuは(16)「体」の項でみた語からの派生語と考えられるが、「～持ちの、～を持っている」の意の接辞はこの言語では -kiである ((Na)では -ko/-kuである) 。また(U)に母音間の単独の k があるのも音韻対応の上からいっておかしい。C.をみる限りでは (Oc)bəjəがそのままの形に「似ている」があがっている以外には、どの言語にも「似ている」もしくは「同じ」の意味の明記はない。

(U)omoti及び(Oc), (J), (Si), (Ma)の諸形は数詞「1」からの派生語と考えられる。このインフォーマントからは採れなかったが、(Na)ではəmutu「おなじ」という語がきわめて普通に用いられる。C.では(Ek)以外の全ツングースに「同じ」の意味の語があるので以下に列挙すると、(S)əmun adali, (Ew)emun urəč, (N)emeentu, (Oc)omonti, (U)omoti, (Ul)omoto/umutu, (Ut)umttu/umətu/əmutu, (Na)əmutuである。

(197)[492]はい		(Hz)---		(J)gisa
(Ew)əj	(Ek1)əəŋ	(U)igkə	(Na)iin	(Si)jee/een
(S)mətər/tannagan	(Ek2)onton	(Oc)ii	(Ut)ii	(Ma)jə/ə

「はい」の意味での(Ew)əjと同源の語はC.によれば(Ew)と(Ma)のみにあがっている。

(S)mətərはC.によれば(S)のみで、(lit.Mo)metü/metüber「同様に、そのように、そう」から入ったものとみている。

(S)tannaganは指示代名詞(S)tajaa/tariから派生したもので「そのような」の意である。

(Ek1)əəŋは不明。(Ek2)ontonにあたると思われる語は、C.には(Ek)アルダン方言onton「それで、それから」があがっており、そこではヤクート語からの借用とみなしている。

(U), (Oc), (Na), (Ut)と同源の語はC.によれば(S)を除く全ツングースにあがっており、皆「はい」の意である。

(J)gisaはKiyose (1977) では二箇所にあがっており、それぞれ訳は「all right, may」、「it may be, so that」となっている。C.によればこれと同源の語は(J)の他に(Ek)kičə-「大事にとっておく」、(Ew)kičəj-「大事にとっておく」、(Ul), (Na), (Ma)のkičə-「努力する」である。(Ek), (Ew)にはヤクート語から入ったものとし、(lit.Mo)のkičije-「努力する、励む」を比較している。

(Ma)jəはC.に見いだせなかった。II III群の語と同源の語である可能性も考えられよう。

(198)[493]いいえ		(Hz)---		(J)---
(Ew)ənñi	(Ek1)əsin	(U)anǰi-a/əimi	(Na)abaa	(Si)ɨɨn
(S)ɐntɐ	(Ek2)əǰə	(Oc)maaki	(Ut)anaa	(Ma)---

(S)ɐntɐと同源の語はC.によればⅢ群の三言語を除く全ツングースにあって「別の、違う」の意である。(U), (Oc), (Na), (Ma)については(174)「ない」の項を参照されたい。

(Ew), (S), (Ek1), (Ek2)の諸形は否定動詞 ə-の種々の活用形と考えられる。

(199)[499]・・だ、・・である	(Hz)təǰi		(J)ina
(Ew)biswm	(Ek1)---	(U)---	(Na)bi-	(Si)bi-
(S)---	(Ek2)bexe	(Oc)---	(Ut)bi-	(Ma)bi-

(Hz)təǰiと同源の語はC.によればtəǰəə/təǰ/ǰəǰə/təddə/tədəの諸形でⅣ群を除く全ツングースにあり、意味は「事実、本当」である。

(J)inaはKiyose (1977) の訳では「是 as for」となっている。C.は先の(197)「はい」でみた(U)igkəなどと同源の語として扱っている。

他の諸形は(173)「ある」でみたものと同じ動詞語幹からなるものである。

(200)[500]・・(で) ない		(Hz)gia		(J)gaiju/əšiin
(Ew)ətwn bisə	(Ek1)---	(U)---	(Na)---	(Si)vaqə
(S)---	(Ek2)əǰə	(Oc)---	(Ut)əsi bee	(Ma)waka

(Ew), (Ek2), (Ut), (J)əšinは否定動詞からなるものである。

(Hz)giaは「別の」の意でⅠ群にある語と同源であろう。これについては(93)「友達」の項を参照されたい。

(J)gaijuのKiyose (1977) の訳は「非 isn't」である。C.はこの語について(174)「ない」でみた(Ul)kəwəとの関係を考えている。

(Ma)wakaと同源の語はC.によれば(Ut)wakala-「禁ずる」、(Ma)waka「・・・でない」、wakala-/wakaša-「非難する、弾劾する」である。池上 (1997) では(Ut)wakkala-「ひねくれる」となっている。

[考察編]

1．同語源、別語源による語形の分布

1.1 全言語が同語源の項目

全言語に同語源の語が観察された項目は、全200項目中44項目あった。その内容は以下のようである。

(3)目、(6)口、(8)手、(16)体、(33)犬、(49)火、(50)風、(51)雲、(55)月、(57)日（day）、(59)年、(61)昼、(62)夜、(64)明日、(65)今日、(70)２、(71)３、(72)４、(73)５、(74)６、(75)７、(76)８、(78)10、(86)母、(89)兄、(90)姉、(97)私、(98)あなた、(102)名前、(111)あれ、(121)前、(122)後ろ、(123)内、(126)下、(132)笑う、(133)泣く、(141)立つ、(142)座る、(147)飛ぶ、(149)殺す、(168)与える、(171)知る、(173)ある、(179)長い

全体のおよそ４分の１ほどであるが、これらの語彙は音変化を問題にしなければ、ツングース諸語が話されているどの地域にあっても通じる語ということになる。したがってこれらの項目はツングース諸語にとってもっとも基本的な語彙ということができる。すなわちツングース諸語にとっての基礎語彙中の基礎語彙である。

1.2 一言語のみが別語源による項目

一言語のみが別語源による語であった項目は、200項目21項目あった。各項目と、別語源の語形は以下のようである。

(7)歯（(Ut)kərəktə）、(10)足（(Ek2)xalgan）、(13)血（(Ew)xuŋəl）、(14)骨（(Ew)ikɯri）、(20)油（(Ut)ilda/nəmuu）、(23)食べ物（(Na)siaori）、(24)卵（(Ut)ŋojokko）、(36)木（(Ew)xiakita）、(46)水（(U)uli）、(54)太陽（(Ew)ňəəltən）、(56)星（(Ut)uňigəri）、(58)（一ヶ）月（(Ew)atkikan）、(69)１（(Ut)geeda）、(85)父（(U)abuga）、(101)だれ（(S)awu）、(109)これ（(U)uti）、(146)飲む（(Ew)kool-）、(159)生まれる（(Ew)bakap-）、(160)死ぬ（(Ew)aǰǰa　oo-/kəkə-）、(166)行く（(Ek2)xuru-）、(181)遠い（(Ew)təgələ）

その一つだけ別であった言語を、多い順にその回数とともに並べると、(Ew)9 (Ut)5 (U)3 (Ek2)2 (Na)1 (S)1である。(Ew)、(Ut)という北及び東の最も周辺部に位置する言語が多くの語彙を取り替えていることがわかる。特に(Ew)では200項目中の５％ほどは(Ew)一言語だけが別語源の語を用いているということになる。特に(13)「血」の(Ew)の語形、(20)「油」の(Ut)ildaは他のツングースになく、その来源が不明である。

1.3 二言語のみが別語源による項目

二言語のみが別語源による項目は200項目中８項目あった。その内容は以下のようである。

(4)耳（(Ew)korit，(U)ku(')ai）、(21)酒（(Ew)minə，(J)nurə）、(28)着物（(Ew)oj，(Ek2)najama）、(37)草（(Ew)nəəǰə，(Na)ňaǰaxa）、(38)薬（(S)naǰǰi，(Ek1)napǰi）、(128)聞く（(U)duisi-，(Na)dosiǰi-）、(137)押す（(Ew)tiňi-，(Na)ǰigda-）、(138)持つ（(S)ga-，(Ek2)ŋaalixin-）

その別であった二言語を、やはり多い順にその延べの回数とともに示すと、(Ew)5 (Na)3 (U)2 (Ek2)2 (Ek1)1 (J)1 (S)1であって、ここでも(Ew)が一番多い。

1.4 Ⅳ群のみが別語源による項目

Ⅳ群の言語は他の三つのどの群からも大きく異なっていると考えられるが、基礎語彙の面からもそのことが言えるだろう。Ⅳ群のみが別語源による項目であったものは200項目中11項目であった。その内容は以下のようである（なお代表として(Ma)の語形を示した）。
(1)頭（(Ma)uǰu）、(2)髪の毛（(Ma)fuňijəxə）、(15)肉（(Ma)yali）、(34)家（(Ma)boo）、(43)道（(Ma)ǰugŪn）、(47)石（(Ma)wəxə）、(91)弟（(Ma)dəo）、(150)着る（(Ma)ətu-）、(163)出る（(Ma)tuči-）、(164)入る（(Ma)dosi-）、(183)熱い（(Ma)xalxŪn）

このうち(43)「道」、(91)「弟」、(183)「熱い」は(Mo)起源と考えられ、Ⅳ群の言語がが(Mo)の影響を強く受けたことを物語っている。

1.5 Ⅳ群と他に一、二言語だけが別語源による項目

これは11項目あった。その内容は以下のごとくである。Ⅳ群はやはり(Ma)のみを代表にあげた。
(45)山（(Ew)xɵɵpkəčən, (Ma)alin）、(60)朝（(Ew)baǰikɯr, (S)əddə, (Ma)ərdə）、(66)今（(Ew)tiək, (Ek2)ərdəət, (Ma)tə）、(90)姉（(Hz)gəgə, (Ma)gəgə）、(99)彼（(S)tari, (Ek2)tawar, (Ma)i）、(119)左（(Hz)xazuta, (Ma)xasxŪ）、(125)上（(Ew)ojda, (S)oroondə, (Ma)ňiŋu/ňiŋudə）、(127)見る（(Ew)kɵɵjət-, (Ma)tuwa-）、(162)置く（(Ut)əksə-, (Ma)sinda-）、(176)小さい（(Ew)kučukən, (Ek2)uša/ušakan）、(194)良い（(Na)uləən, (Ma)xojo/sain）

言語別の延べ回数は(Ew)6 (S)3 (Ek2)3 (Hz)2 (Ut)1 (Na)1であって、ここでも(Ew)が断然多い。ここまでの1.1から1.5までにあがった項目は、一、二の言語、もしくはⅣ群の言語では別語源の語形が用いられるが、その他の言語では基本的に同語源の語が用いられる項目である。すなわちツングース諸語の中での共有度が高い項目ということになる。1.1から1.5までの項目の数を合計すると95項目になるので、そのような項目は基礎語彙Ａの約半数を占めるということになる。

1.6 群によって別語源のものが相補的に分布している項目

群の内部では比較的同語源の語形が用いられているが、別の群にうつると別語源の語が用いられている、というような状況を示す項目がある。このような項目はこの四つの群への分類の妥当性を強めるものである。これには以下のような14の項目がある。
(32)魚（Ⅰ－Ⅱ Ⅲ－Ⅳ）、(52)雨（Ⅰ－Ⅱ Ⅲ－Ⅳ）、(93)友（Ⅰ－Ⅱ Ⅲ－Ⅳ）、(95)女（Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(96)人（Ⅰ－Ⅱ ⅢⅣ）、(104)声（Ⅱ－Ⅰ ⅢⅣ）、(153)作る（Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(157)数える（Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(161)会う（Ⅰ Ⅱ－ⅢⅣ）、(165)来る（Ⅰ Ⅱ－ⅢⅣ）、(175)大きい（Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(184)寒い（Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(188)少ない（Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ）、(193)色（Ⅰ Ⅱ－ⅢⅣ）

これを相補分布のタイプ別に分けてみると次のようである。
Ⅰ Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ (95)女、(153)作る、(157)数える、(184)寒い、(188)少ない
Ⅰ－Ⅱ Ⅲ－Ⅳ (32)魚、(52)雨、(93)友
Ⅰ Ⅱ－ⅢⅣ (161)会う、(165)来る、(193)色

Ⅰ－ⅡⅢⅣ(96)人　　Ⅱ－ⅠⅢⅣ(104)友　　Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ(175)大きい

1.7 語源がバラバラな項目

1.1から1.5までみたような項目とは逆に、さまざまな語源の語があがってくるような項目がある。その理由はいくつか考えられるが、ツングース諸語ではより具体的な意味を持った語に細分化されている項目として、まず(136)打つ、(148)焼く、(152)切る、(154)開ける、(155)閉める、(167)動く、(170)思う、などの動詞があった。また各々の言語で意味の拡大や縮小が起きたためにさまざまな語形が現れていた項目には、(9)指、(25)鳥、(32)魚、(40)爽、などがあった。他にやはり抽象的・一般的な概念である(30)物、(93)友達、(105)音、(107)心、などに多くの語形がみられた。

2．他の系統の言語からの借用について

資料編でみてきたように、少なくともC.に指摘されている範囲内でツングース諸語への借用が問題になった語形はほとんどがモンゴル語からのものであった。また借用が問題となるような特に文化的な語彙項目は以下のようなものであった。
(18)薬、(19)塩、(21)酒、(22)タバコ、(27)糸、(29)紙、(35)金、(103)字、(106)ことば、(108)神、(151)読む

3．別語源の語の定量的計測

10ほどのツングース諸語が互いにどのような関係にあるのかを整理する目的のために、Ikegami (1974) の分類が行われたわけだが、これは主に音対応に基づくものであった。基礎語彙からの定量的な計測によってはどのような結果が出るだろうか。そこで任意の二言語を選んでその間でどのくらい別の語源の語が使われているのかを数えてみることにした。すなわちその数が大きければ大きいほど、その二つの言語の間の似かよりは少なく、互いには通じにくい、ということになる。また同じ群の内部ではその数は小さく、群が異なればその数は大きくなることが当然予想される。ただしこの計測はきわめておおざっぱなもので、プラスマイナス５語程度の誤差はあるものとして、おおまかな目安を示すものと考えていただきたい。

3.1 同じ群の内部での差異

Ⅰ群　(Ew)-(Ek1)95　　(S)-(Ek1)53　　(Ek1)-(Ek2)75
Ⅱ群　(U)-(Oc)51
Ⅲ群　(Na)-(Ut)44

3.2 二つの群の間での差異

Ⅰ-Ⅱ群間　(Ek1)-(U)88　　(Ek1)-(Oc)78
Ⅱ-Ⅲ群間　(U)-(Na)75　　(U)-(Ut)82　　(Oc)-(Na)62　　(Oc)-(Ut)61
Ⅲ-Ⅰ群間　(Ew)-(Na)112　　(Ek1)-(Na)88　　(Ek1)-(Ut)90

(Ew)と他の言語との差異が大きく、他方(Oc)とⅢ群の差異が意外に小さいことがわかる。これはおそらく(Oc)がⅢ群から大きな影響を受けたためと考えられる。

［参考文献］

池上　二良　1987　「アムール川下流地方と松花江地方－「満州」の語源にふれて－」『東方学会創立四十周年記念東方学論集』　東京.

_____　1994　「ウイルタ語の北方言と南方言の相違点」　『北海道立北方民族博物館研究紀要』第３号　網走，北海道立北方民族博物館.

_____編　1997　『ウイルタ語辞典』　札幌，北海道大学図書刊行会.

小沢　重男　1983　『現代モンゴル語辞典』　東京，大学書林.

風間伸次郎　1996a　「ヘジェン語の系統的位置について」　『言語研究』109，117-39　東京，日本言語学会.

_____　1996b　『オロチ語基礎資料』ツングース言語文化論集７　鳥取大学教育学部.

朝克採録・著　津曲敏郎編　1995　『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』　ツングース言語文化論集６　小樽商科大学言語センター，小樽.

朝克採録・著　津曲敏郎編　1997　『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』　ツングース言語文化論集11　小樽商科大学言語センター，小樽.

津曲　敏郎　1989　「女真語」　亀井孝・河野六郎・千野栄一編　『言語学大辞典』第２巻　東京，三省堂，251-2.

_____　1992　「満州語」　亀井孝・河野六郎・千野栄一編　『言語学大辞典』第４巻　東京，三省堂，203-5.

_____　1997　「エウェンキー語オルグヤ方言についての覚え書き」　『小樽商科大学人文研究』93，小樽，小樽商科大学.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（ＡＡ研）　1966，1967　『アジア・アフリカ言語調査票』　上(1966)，下(1967)　東京.

羽田　亨編著　1937　『満和辞典』　京都.

福田　昆之　1987　『満州語文語辞典』　ＦＬＬ，東京.

山本　謙吾著　アジア・アフリカ言語文化研究所編　1969　『満州語口語基礎語彙集』　東京，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

安俊　1986　『赫哲語簡志』　北京，民族出版社.

Avrorin, V. A. i E. P. Lebedeva　1978　*Orochskie teksty i slovar'.*　Leningrad, Nauka.

Cincius et al.　1975, 1977　*Sravnitel'nyj slovar' Tunguso-man'chzhurskix jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju, tom 1, tom 2.*　Leningrad, Nauka.

Cincius, V. I. i L. D. Rishes　1952　*Russko-evenskij slovar'.*　Moskva, Gosdarstvennoe izdatel'stvo inostrannyx slovarej.

Ikegami, J.　1974　Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker.*　Berlin, Akademie-Verlag, 271-2.

Kiyose, G. N.　1977　*A Study of the Jurchen Language and Script.*　Kyoto, Hōoritubunka-sha

Novikova, K. A.　1968　Ewenskij jazyk.　*Jazyki narodov SSSR 5.*　Leningrad, AN SSSR.

_____ 1980 *Ocherki dialektov evenskogo jazyka (tom 2).* Leningrad. AN SSSR.

Onenko, S. N. 1980 *Nanajsko-Russkij slovar'.* Moskva, Izd. Russkij jazyk.

_____ 1986 *Russko-nanajskij slovar'.* Moskva, Russkij jazyk.

Petrova, T. I. 1936 *Ul'chskij dialekt Nanajskogo jazyka.* Moskva/Leningrad, Uchpedgiz.

_____ 1967 *Jazyk orokov(ul'ta).* Leningrad, AN SSSR.

Schmidt, P. 1923 The language of the Olchas. *Acta Universitatis Latviensis* 8, Riga.

_____ 1927 The language of the Oroches. *Acta Universitatis Latviensis* 8, Riga.

Shneider, E. P. 1936 *Kratkij Udejsko-Russij slovar'.* Moskva/Leningrad, Uchpedgiz.

Sunik, O. P. 1985 *Ul'chskij jazyk.* Leningrad, AN SSSR.

Tsumagari, T. 1992 A basic vocablary of Khamnigan and Oluguya Ewenki in northern Inner Mongolia 『北方文化研究』 21, 札幌, 北海道大学文学部

Zhang, Yanchang, Zhang Xi & Dai Shuyan 1989 *The Hezhen language.* Jilin Changchun, University Press.

第四分冊

北方ユーラシア言語文献論集

共同研究

「北方ユーラシアの先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究」

文部省科学研究補助金（総合研究A）

（課題番号　06301054）

第1分冊　研究経過報告書
第2分冊　北方ユーラシア関係文献抄
第3分冊　北方ユーラシア言語文献資料（1）～（4）
第4分冊　北方ユーラシア言語文献論集

研究代表者　　金子　亨

「北方ユーラシア先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究」
研究成果報告書第４分冊
『研究経過報告書』

文部省科学研究補助金（基盤研究A）（課題番号　06301054）

REPORT　ON
THE LINGUISTIC DATA-BASE OF LANGUAGES OF INDIGENOUS PEOPLES IN NORTHERN EURASIA AND THE TYPOLOGICAL DESCRIPTION OF THEIR FEATURES
VOL. IV :PAPERS ON NORTHERN EURASIA

(GRANT-IN-AID PROJECT FOR SCIENTIFIC RESEARCH)
PROJECT NUMBER 06301054
1995～1997

発行　1998年3月31日
編集　金子　亨（研究代表者）
263　千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学外国語センター
tel/fax　043-290-3600
tohru@bun.l.chiba-u.ac.jp